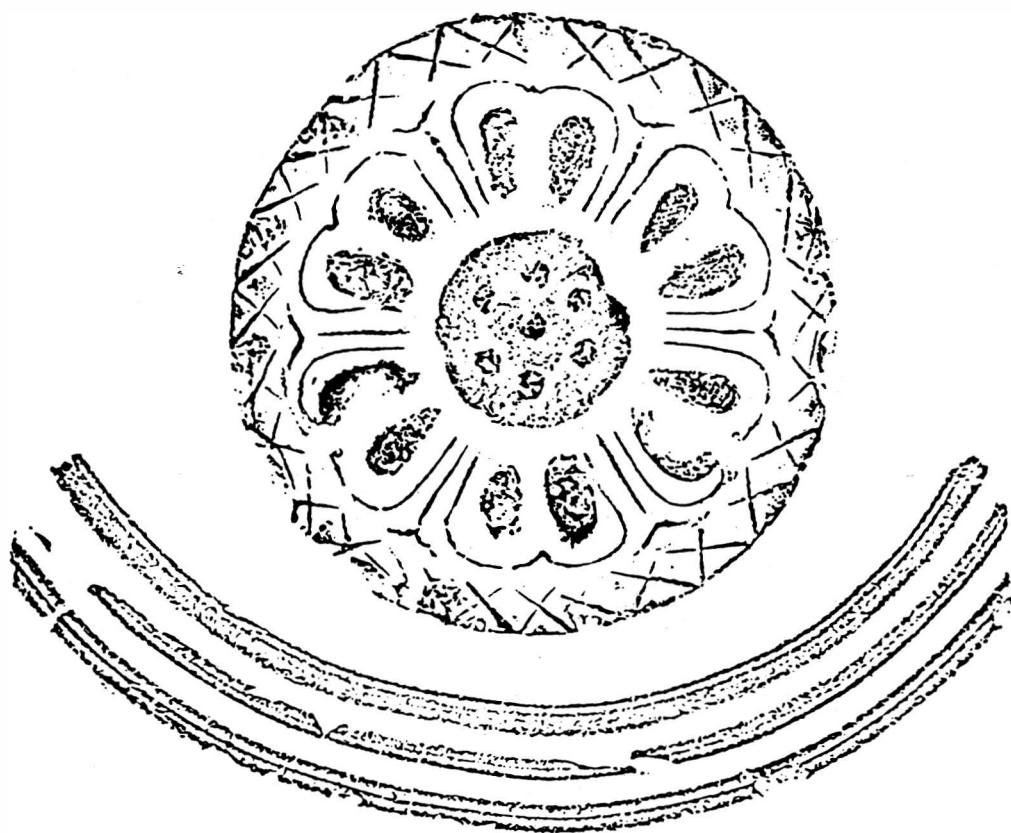


福島県文化財調査報告書第91集

# 関和久遺跡 IX

— 史跡指定調査概報 —

1981年3月



福島県教育委員会

福島県文化財調査報告書第91集

# 関和久遺跡 IX

—史跡指定調査概報—

1981年3月

福島県教育委員会



## 序 文

関和久及び借宿の広範な地域は、大正末期から多賀城系と下野薬師寺系の古瓦が出土することが学界に知られ、またそこから出土する多賀城系の瓦から神亀5年設置の白河軍団跡と推定されてきました。

その後、約半世紀の間に借宿については寺院跡であることが判明し、その一部ではありますが県史跡に指定されました。県教育委員会は関和久遺跡の重要性に鑑み、研究者の方々の助言を得、遺跡の性格を解明するとともに国史跡指定の資料を得るため昭和47年より調査を継続してまいりました。

この調査により、現在までの調査地点は古代白河郡家跡であり、範囲もほぼ確実となってまいりました。本年度は第9次調査を終了し、所期の目的を達成することができました。ここに本年度の調査成果につきましてその概略を報告いたしますので、広く県民の方々に認識を深めていただくとともに、研究資料としてご活用いただければ幸甚に存じます。

最後に、この調査にご指導いただいた県文化財保護審議会委員伊東信雄博士はじめ各指導委員、ご協力いただいた宮城県多賀城跡調査研究所の方々、地元泉崎村、泉崎村教育委員会、地元協力者各位に深く謝意を表するものであります。

昭和56年3月

福島県教育委員会教育長

辺 見 栄 之 助

# 目 次

## 調 査 要 項

第1章 調 査 報 告	1
第1節 前年までの調査	1
第2節 調 査 経 過	2
第3節 調 査 日 誌	3
第2章 発 見 遺 構	7
第1節 建 物 跡	7
第2節 一 本 柱 列	10
第3節 溝 跡	11
第4節 土 拡	14
第3章 出 土 遺 物	16
第1節 瓦	16
第2節 土 師 器	16
第3節 須恵器・その他	22
第4章 考 察	27
第1節 遺 構	27
第2節 出 土 遺 物	29
第3節 ま と め	30

## 調査要項

- 1 名称 関和久遺跡
- 2 調査地点 西白河郡泉崎村関和久字中宿
- 3 調査主体 福島県教育委員会
- 4 指導委員 伊東信雄，坪井清足，後藤勝彦，梅宮 茂，渡辺一雄
- 5 調査担当 木本元治
- 6 調査員 日下部善己，辻 秀人，鈴木文夫，長嶋雄一 補助員 仲田茂司
- 7 指導・協力 岡田茂弘，阿部義平，桑原滋郎，進藤秋輝，平川南，吉沢幹夫，白鳥良一，  
佐藤則之，高野芳宏
- 8 調査協力 泉崎村，泉崎村教育委員会，泉崎村公民館，関平婦人会，佐川一二ほか地  
元有志15名
- 9 調査期日 昭和54年10月29日～12月5日
- 10 地区割り B MNo.1～No.2(真北)を50ライン，B MNo.1を通り直交する線をK Aライ  
ンとし，3mごとに西に51・52……，北にK B・K A……とした。地点表  
示のN○○m，W○○mもB MNo.1を基点とした。

# 一凡 例一

- 1 この調査は国庫補助事業である。
- 2 編集は木本が担当した。
- 3 第1章・第3章・第4章第2・3節は木本が執筆した。
- 4 第4章第1節は伊東が執筆した。
- 5 第2章は木本，辻，日下部，長嶋が執筆した。
- 6 墨書土器の判読は平川が行なった。
- 7 平瓦・ロクロ調整杯の分類については第1・2表を用いた。

	第 1 類	第 2 類	第 3 類	第 5 類	第 6 類	第 7 類
凸面	ロクロ目	縦ヘラ削り	不定方向ナデ 縦ヘラ削り	縄目タタキ	ヘラ削り	格子目タタキ
凹面	布目、模骨痕	ロクロ目	布目、模骨痕	布目、模骨痕	ヘラ削り	布目、模骨痕

第1表 平瓦分類表

再調整	切り離し	類 別	再調整	切り離し	類 別
回転ヘラ削り (体下部+底部) 	不 明	1 類	回転ヘラ削り (一部) 	回転ヘラ切り	3 a 類
	回転ヘラ削り	1 a 類	回転 ヘラ削り 切り離し痕 	回転糸切り	3 b 類
	回転糸切り	1 b 類	手持ちヘラ削り (一部) 	静止糸切り	3 c 類
	静止糸切り	1 c 類	手持ちヘラ削り (一部) 手持ち ヘラ削り 切り離し痕 	回転ヘラ切り	4 a 類
手持ちヘラ削り (体下部+底部) 	不 明	2 類	再調整なし 	回転ヘラ切り	5 a 類
	回転ヘラ切り	2 a 類	再調整なし 切り離し痕 	回転糸切り	5 b 類
	回転糸切り	2 b 類		静止糸切り	5 c 類
	静止糸切り	2 c 類			

第2表 ロクロ整形杯形土器分類表

# 第1章 調査報告

## 第1節 前年までの調査

昭和47年度 10月30日～11月15日（関和久遺跡Ⅰ 1973年3月 福島県教育委員会）

航空測量図作成と予備調査，東群建物中，南・中・北の3棟の有礎建物跡の存在を確認。

昭和48年度 10月11日～11月10日（関和久遺跡Ⅱ 1974年3月 福島県教育委員会）

東群の有礎建物跡S B01・02・03と，西群の有礎建物跡S B05・06と掘立のS B04・07を検出した。

昭和49年度 5月27日～6月5日（関和久遺跡—県道拡幅工事に伴う調査—1974年12月 泉崎村教育委員会）

県道白河—母畑線拡幅に伴う緊急調査。

台地中央部267m<sup>2</sup>を帯状に発掘，竪穴住居跡，溝跡，掘立柱柱穴，ピットを検出。遺物は土師器，須恵器，須恵系土器，円面硯，古銭，植物種子を検出。

昭和49年度 10月21日～11月22日（関和久遺跡Ⅲ 1957年3月 福島県教育委員会）

遺跡の南西部を調査，有礎建物跡3棟，3溝跡2条，井戸跡1基，竪穴住居跡1棟を検出。調査地区西方，南方で検出された大溝跡は郡家の西至を区画する可能性が考えられ，一辺は2.5～3町と推定された。

昭和50年度 10月20日～11月22日（関和久遺跡Ⅳ 1976年3月 福島県教育委員会）

遺跡の東南部を調査，有礎建物跡4棟，掘立柱建物跡9棟，竪穴住居跡1棟，大溝跡2条，小溝跡2条を検出された。東南隅では大溝のコーナーが検出され，東西は2.5町であることが判明した。

昭和51年度 10月20日～11月20日（関和久遺跡Ⅴ 1977年3月 福島県教育委員会）

遺跡の東辺部を調査，掘立柱建物跡4棟，大溝跡3条を検出。大溝は郡家跡東辺を区画するものと考えられ，3時期の変遷が認められた。

昭和52年度 11月1日～12月3日（関和久遺跡Ⅵ 1978年3月 福島県教育委員会）

台地中央部，東縁部を調査，掘立柱建物9棟，1本柱列1基，大溝2条，小溝1条，竪穴住居跡2棟，ピット等が検出された。大溝のうち東縁部のは郡家の東縁を区画するものと考えられた。遺跡の規模は南北が3町を越えることが判明した。

昭和53年度 10月25日～11月25日（関和久遺跡Ⅶ 1979年3月 福島県教育委員会）

台地北半部を調査，県道の北側より1本柱列1基，門跡1棟，掘立柱建物跡5棟，ピット3基を検出。1本柱列は「院」を区画する柵で，53年度の部分はその東南コーナーと推定。遺跡の南辺より約4町付近が北限と判明。

昭和54年度 10月29日～12月5日（関和久遺跡Ⅷ 1980年3月 福島県教育委員会）

遺跡北半部の台地の西端部（遺跡全体では東西の中央部）を調査。2間×5間の東西棟で4回の建替えのある建物を中心に，それ以前の時期の建物の掘り込み地業，これらを取り囲む一本柱列，溝，南門と考えられる四脚門などを検出。一つの「院」の中心地区と推定された。



## 第2節 調査経過

昭和55年度の調査は遺跡北半部、台地上の54年度調査の「院」の東側、すなわち台地中央部の性格を確認する目的で開始された。まず院の東辺の一部を検出し、それとその東に検出される遺構群の関連を比較する方法を取ることにした。

### 第1トレンチ

第8次調査地区の東側の農道の東の畑（N区）にJ T・K A—62～71グリッドの6 m×30mのトレンチを設定した。トレンチ西端部のJ T・K A—69～71区より院東辺を区割する一本柱列とその一本柱列が取り着く門跡、一本柱列の両端に掘られた溝跡らしきものが検出されたのでJ R J S—68～71区を拡張したところ、これらは院の東門に当たる八脚門S B 104とそれに取り着く一本柱列S A 106、溝跡であることが判明した。したがって、第8次調査で院と考えられた遺構群は東が正面である可能性が強くなった。

トレンチ東半部のJ T・K A—62～65グリッドからは東西4間以上の東西棟と考えられる掘立柱建物跡の一部を検出したので、J SとK Bの62～65グリッドを拡張したところ、これは東西5間、南北2間で南面に廂の付く官衙風建物S B 105であることが判明した。さらにS B 105の北側柱穴の一部は溝に切られており、S B 105に切られた古い建物、S B 107・108・120や、そのどれかに伴う目隠屏と考えられる一本柱列S A 121も検出された。これらのうちS B 107は東西に長い東西9間以上、南北2間の建物で、第2トレンチからさらに東に延びている。

遺物はS A 106に沿った溝S D 101・103、S B 105北側の溝S D 109から多くの土師器が出土し中には「白」・「尉」等の墨書があるものがある。

### 第2トレンチ

第1トレンチ東半部建物の東・南側の遺構を検出するためJ K～K B—59・60グリッドに南北に長い6 m×36mのトレンチを設定した。なお60グリッドの部分は農道のため調査不可能だった。

第2トレンチ北端部J T—K B—59・60グリッドからはS B 107の東の延長、S D 109の東側、これらより新らしい径2 m～3 mのピットが検出されている。S B 107の柱穴の一部はS K 113の底面より検出されている。

J K～J S—59・60グリッドにかけては、南北に走る中世の遺物を出土する溝S D 102、須恵器長頸壺を出土したS K 110を検出したのみで他の遺構は見られなかった。

S D 118の南側を検出するためJ K・J L—56～58グリッドを拡張したところ、その東にS K 119・121、S B 122を検出した。S K 119・121は土取り穴と考えられる。

### 第3トレンチ

台地中央部の遺構を検出するために第2トレンチに直交するJ Q・J R—51～58グリッドに6 m×24mの東西に長いトレンチを設定した。

J Q・J R—57・58に南北に走る溝S D 118、J Q・J R—51～53にS K 117を検出する。S K 117は土取り穴らしい。その他は小溝やピットが数基あるのみで他に目ぼしい遺構・遺物は検出されなかった。

### 第3節 調査日誌

10月21日（火） 雨のち曇

現場の設営，器材整理。規準杭設定No.74（N16,983m，W・E Om），No.75（N16,983m，W31,925m），No.76（N52,971m，W31,925m），No.77（N52,971m，W68,455m），No.78（N86,341m，W68,455m），No.79（N120,000m，W68,455m），No.80（N120,000m，W74,375m），No.81（N120,000m，W86,577m），No.82（N120,000m，W34,430m）。第1トレンチ，N区JT・KA-62～71を設定。

10月22日（水） 晴，一時曇

第1トレンチ表土剥離開始，30～50cmで黒色の遺構検出面に至る。JT・KA-68～71グリッドで掘立柱柱穴，溝検出。遺構埋土は黒褐色～暗茶褐色でロームブロックを含むものもある。

10月23日（木） 晴

JT・KA-62～65グリッド表土剥離，掘立柱柱穴群検出。JT-62～65に並ぶ柱穴はJT-65に北に折れ，東西4間以上，南北2間以上の建物となるらしい。KB-62～65グリッド設定。

10月24日（金） 晴

KB62～65グリッド掘り込み。フワフワの新しい埋土を有する溝検出し，上面を掘り込む。建物は南北2間で北柱列は溝に切られている。KA-69・70グリッドの大きな落込み掘り込み。

10月27日（月） 晴，一時雨

規準杭設定No.83（N120,000m，W39,000m），No.84（N129,000m，W48,000m），No.85（N84,000m，W48,000m）。JK～KB-59，60に第2トレンチ設定，JS～KB-59・60グリッド表土剥離。JT・KA-69・70グリッドの柱穴列精査。

10月28日（火） 晴，時々雨

JT・KA-68～71グリッド精査，柱穴列東の落ち込みは溝となり柱穴群の前で切れている。柱穴群は「門」の一部になるらしい。第2トレンチJQ～JS-59・60グリッド表土剥離，ピット，溝検出。後藤委員指導，県文化財保護審議会委員一行来訪。

10月29日（水） 曇，時々晴

JS-68～71グリッド表土剥離，柱穴群の続きを検出。JO～JQ-59・60グリッド表土剥離，昨日検出した溝はさらに南に延びる。

10月30日（木） 晴

JS-69～71グリッド精査，2～3回の建替えのある八脚門と判明。第2トレンチ精査。

10月31日（金） 晴

JS～KA-69～71精査，一本柱列西側の溝掘り込み。第2トレンチをJJ-59・60に拡張。

11月4日（火） 晴

JS～KA-70・71グリッド精査，柱穴一部掘り込み。JS-63～66グリッド拡張，柱穴検出。

11月5日（水） 晴

JS～KA-70グリッド精査。JS-62～65グリッド精査，柱穴は建物の廂と判明。

11月6日(木) 晴

門S B104, 一本柱列S A106掘り込み。第3トレンチJ R・J S-55・56グリッド表土剥離。

11月7日(金) 晴

S B104切り合い確認作業。第3トレンチJ R・J S-53・54グリッド表土剥離。

11月10日(月) 晴

J R-69~71グリッド表土剥離, 精査。門全体を検出し略測図作成。J R~K B-62~66グリッドの建物群精査。

11月11日(火) 晴

第1トレンチ全面精査。S B104は2回, S A106は4回の建替えと判明。

11月12日(水) 晴

S B104 S A106精査。S B105掘り込み。S D109精査。

11月13日(木) 雨のち晴

午前中雨のため図面検討。午後現場で指導員の指導を受ける。午後2時よりNHK取材。

11月14日(金) 晴

S B111・120・121・S D109精査・切合い確認。J R~K B-62~71グリッド遣り方設定。

11月17日(月) 曇

J R-K B-62~71グリッド清掃・写真撮影。S K110掘り込み。J R~J S-55~58精査。

11月18日(火) 晴

J K~K A-59・60・J R・J S-51~58グリッド精査, S B104 付近写真撮影。O区-J Q~J R-81・82グリッド設定, 掘り込み開始。坪井委員着。

11月19日(水) 晴

J R~K B-62~71グリッド実測。S K113掘り込み。坪井委員の指導を受ける。

11月20日(木) 晴

S D102・S K114・115掘り込み。J Q・J R-81・82グリッド精査。実測継続。

11月21日(金) 晴

S D102 S K117掘り込み。J Q・J R-81・82グリッド精査。実測継続。

11月25日(火) 曇, 時々雨

S D102・118, S K117掘り込み。

11月26日(水) 雨のち晴

S B105付近遺構を再精査, ダメ押しを行なう。S B104実測。

11月27日(木) 晴

昨日同様S B105付近再精査, S B104実測。

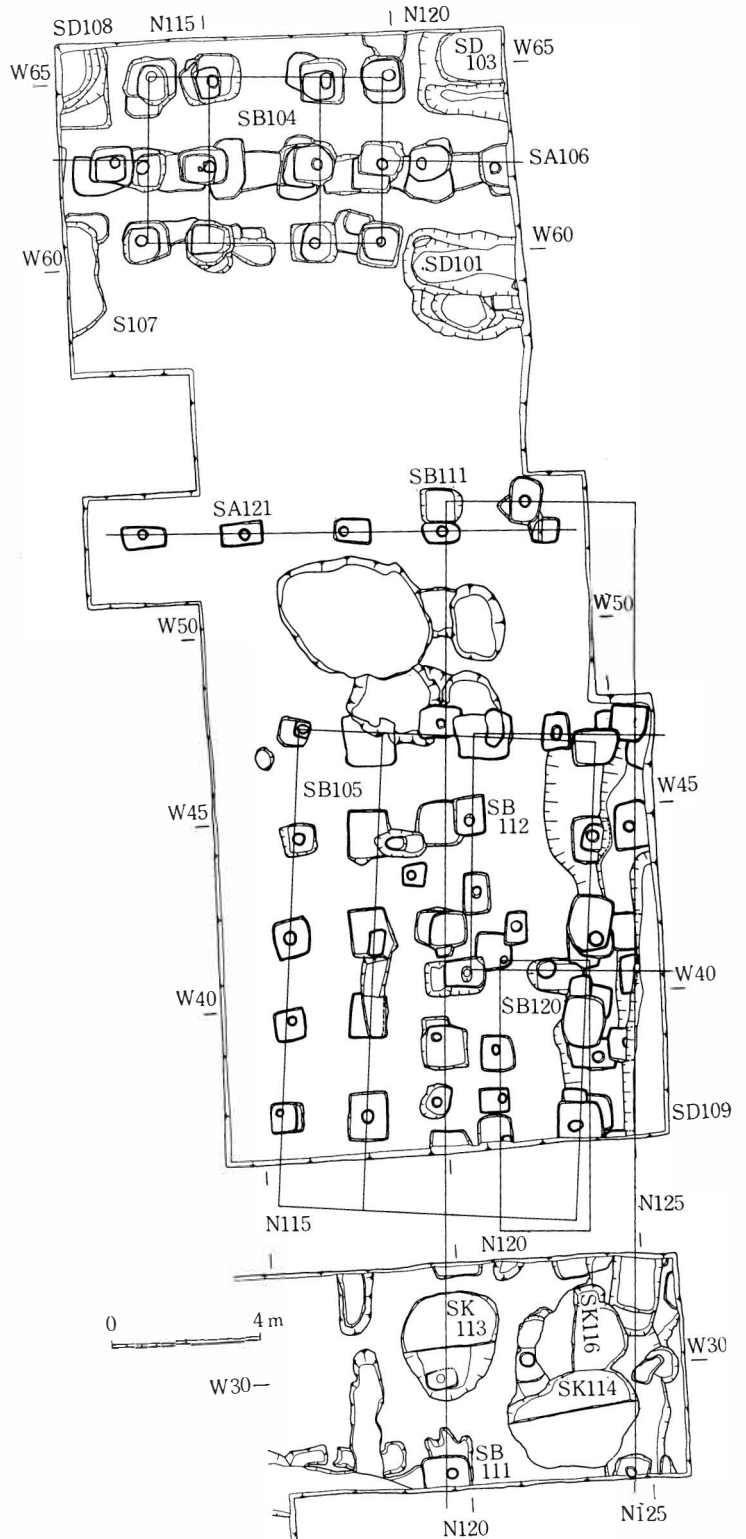
11月28日(金) 曇

S B105付近再精査, S B104, S A106実測完了。第2・3トレンチに遣り方設定。

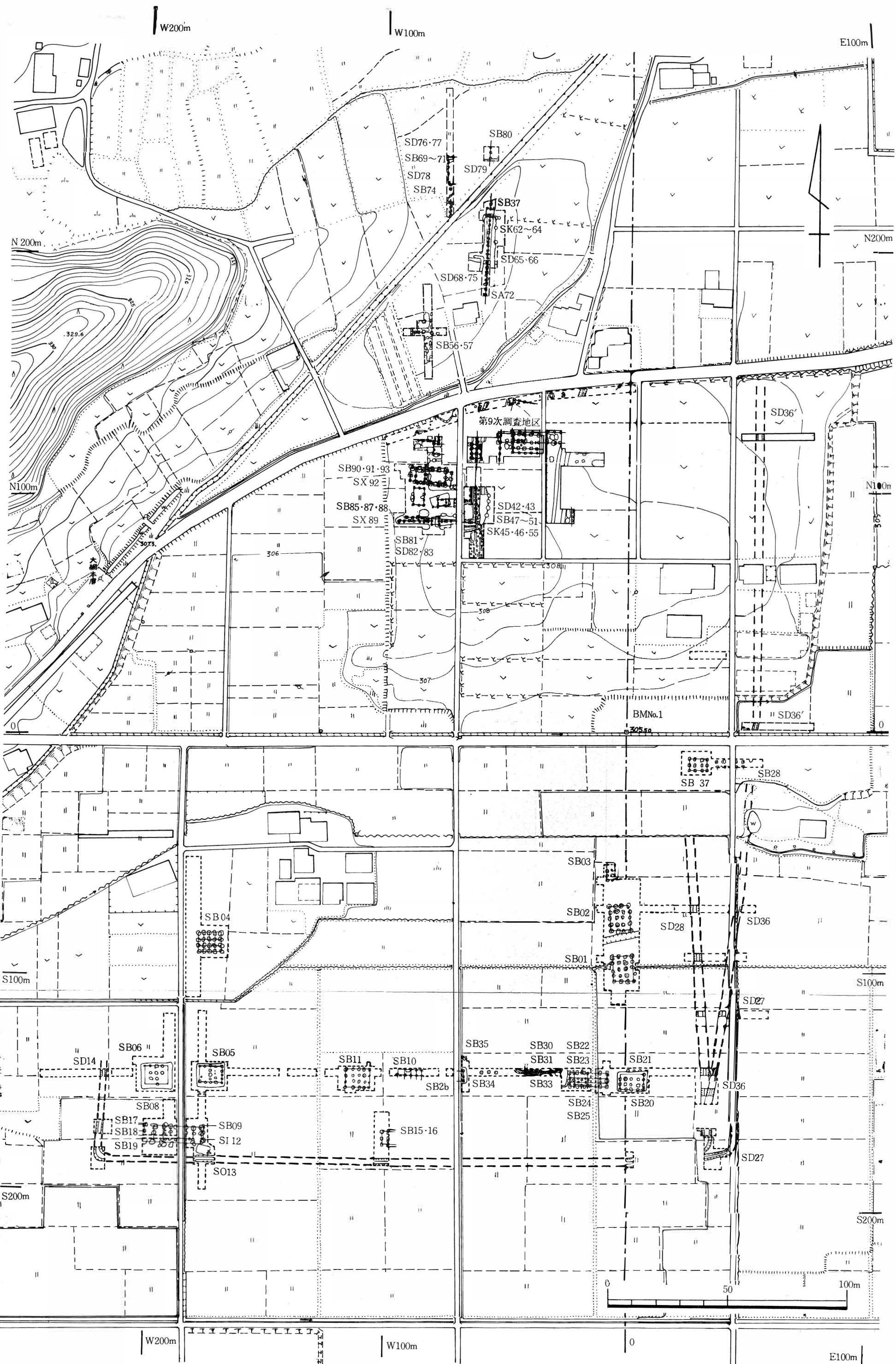
11月29日(土) 曇のち晴

午前中全体清掃, 第2・3トレンチ実測。午後現地説明会。

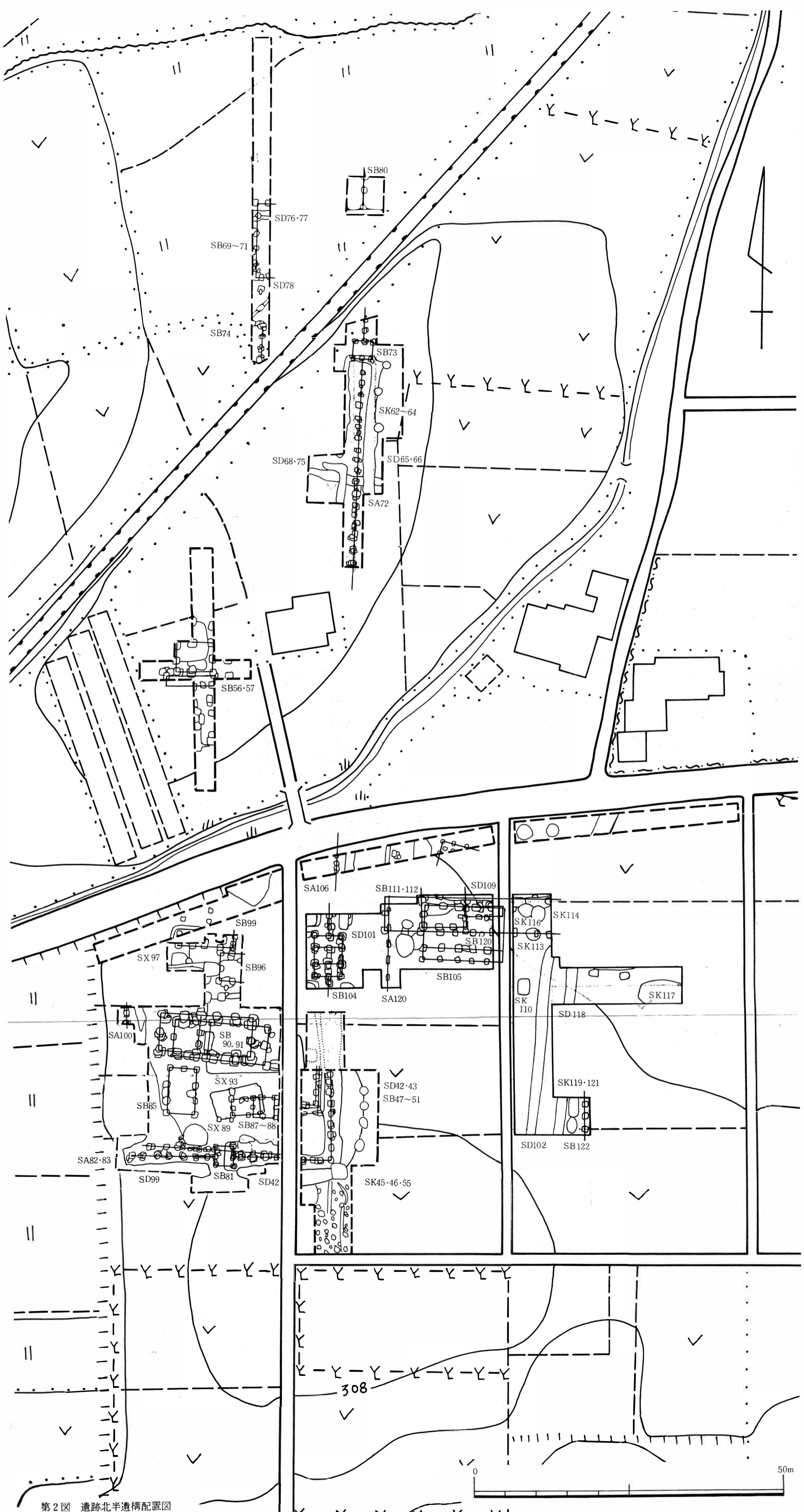
12月1日(月)～12月5日(金)  
 第2・3トレンチの遺構実測。  
 SB104・SA106断ち割り。SB  
 105付近の細部検討。12月5日午後  
 徹収。



第3図 第1トレンチ遺構配置図



第1図 遺跡全図・遺構配置図



第2図 遺跡北半遺構配置図

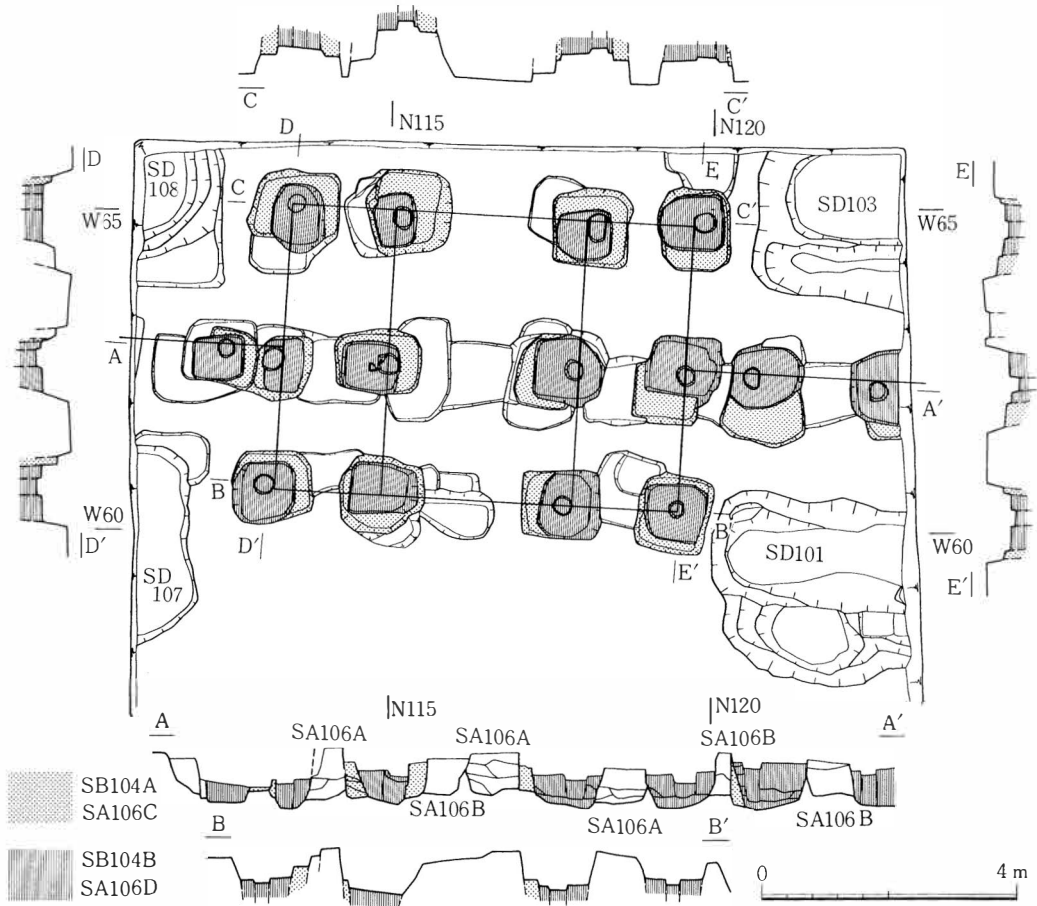
## 第2章 発見遺構

### 第1節 建物跡

S B104 (第4図 第3・4図版)

N区JR～KA-70・71グリッドより検出された東西2間、南北3間の総柱の掘立柱建物跡である。この建物は建替えが行なわれており、A(旧)・B(新)の2期に分けることができる。A期の掘り方は一辺1m～1.3mの方形又は長方形を呈し、ローム粒子を含むややしまりの悪い暗茶褐色土が埋められており、柱痕はB期の柱穴の掘り方に切られて残ってない。これはB期の柱穴の掘り方が大きく重複しているためで、柱位置はB期のほぼ同じと考えられる。

S B104 Bの柱穴はS B104 Aの柱穴を切っており、北妻中央とその南の柱穴を除く全てがA期の柱穴に納まるような形で切っており、一辺60cm～1.1mの不整形方形を呈し、黒褐色の軟質土が



第4図 S B104 S A106

埋められている。柱痕は東側柱の南から2番目を除いて径25cm～40cmのものが全てに見られる。柱間隔は柱痕の中心で梁行が南妻で東から2m+2.4m、次が約2.1m+2.3m、次が2.1m+2.3m、北妻が2.15m+2.4mとなり、柱痕の端まで加えて考えると7尺5寸(2.25m)等間と考えられる。桁方向は東側柱が南より約1.8m+約2.9m+1.75m、中央列で1.8m+2.9m+1.75m、西側柱列で1.7m+3m+1.7mとなっている。この柱痕の位置にはややばらつきがあり、中央が10尺とすれば両側は5尺5寸が一番落着きが良いようである。

この建物は桁行の中央の柱間が広く、建物前面では大溝が切れ土橋状になっており、この溝に沿った一本柱列も取り着いており、桁行5尺5寸+10尺+5尺5寸、梁行7尺5寸等間の八脚門と考えられ、桁行方向がN-3°-Eとなっている。時期はS B104Aの埋土から回転ヘラ削り再調整のある内黒土土器の杯破片が出土しているので9世紀以降と考えられる。

#### S B105建物跡 (第5図 第5・8・9図版)

J S~14B-62~65グリッドより検出された東西棟である。身舎西妻2間、北側柱列4間分、南入側柱列4間分、南廂柱列4間分を検出した。東妻柱列は農道の下になっているため調査できなかったが5間×2間の身舎に南廂を付けた建物と見られる。身舎の柱穴は120cm×80cm前後の長方形、廂のそれは一辺80cm前後の略方形を呈する。壁は垂直に掘り込まれている。柱は直径20cm前後の丸柱である。南廂柱列で柱痕跡の心・心で西より3.0m、2.55m、2.2m、2.55mを測り、柱間は10尺、8尺、7尺、8尺(+10尺?)で計画されている可能性が強い。建物方向はN-83.5°-Wである。本建物跡はS B120、S B112、S B111と重複しており、切り合い関係からこれらの中で最も新しいものと判断される。

#### S B111建物跡 (第5図 第5・8・9図版)

J T~K B59~66グリッドより検出された長大な東西棟で、梁行2間、桁行9間以上である。柱穴は一辺1.2m前後の略方形を呈し、壁はやや斜めに掘り込まれている。柱は直径25cm前後の丸柱である。柱痕跡は約半数の柱穴で検出されたにすぎず、柱間寸法は検討できなかった。建物方向はN-86.5°-Wである。本建物跡はS B120、S B112、S B105、S D109と重複しており、切り合い関係からS B120、S B112より新しく、S B105、S D109より古いものと判断される。

#### S B112建物跡 (第6図 第5・8・9図版)

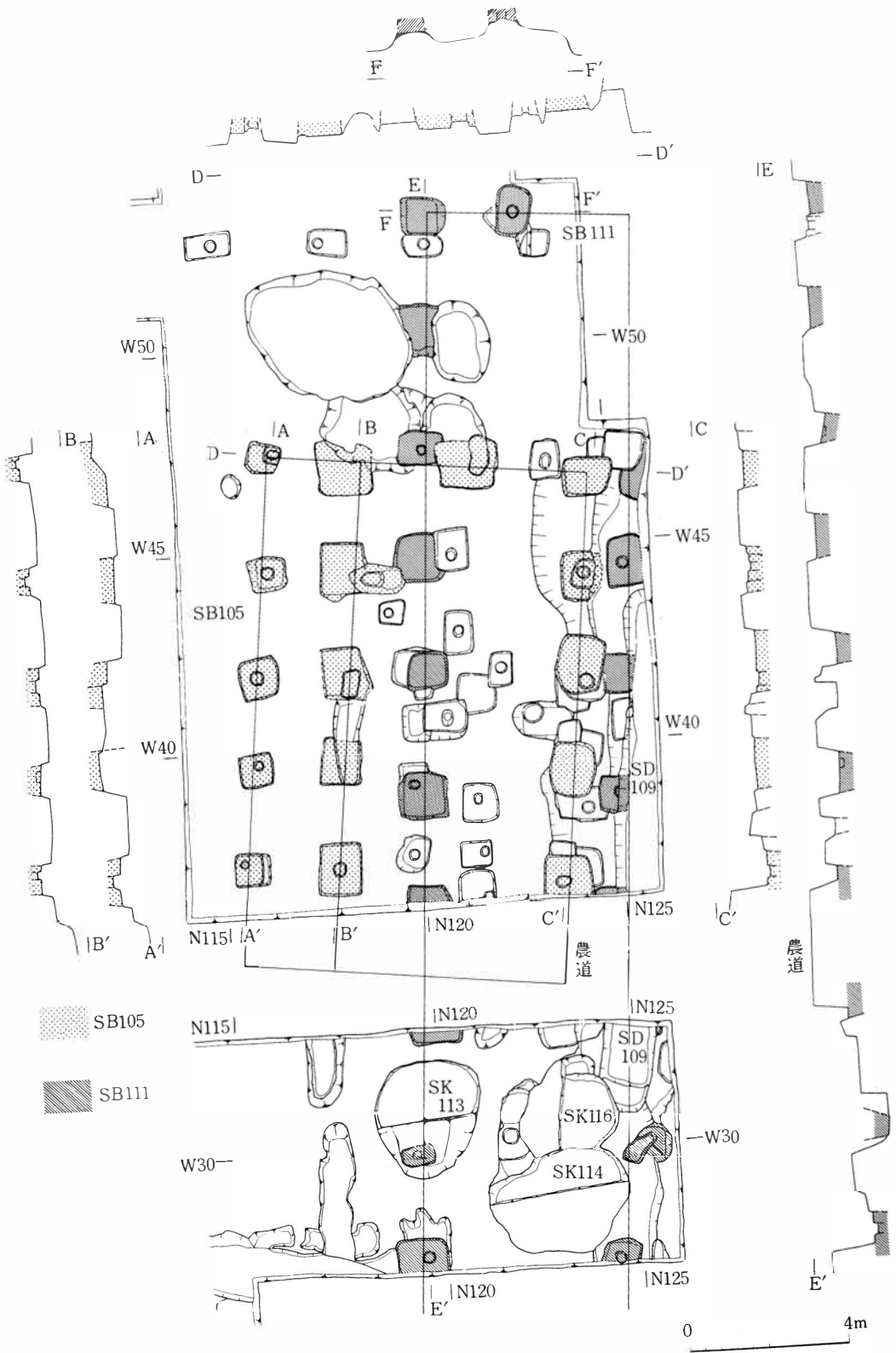
J T~K B-64~65グリッドで検出した東西3間、南北2間以上の掘立柱建物跡で、南北軸はN-3.5°-E方向を示す。S B120を切り、S B111に切られているのでこの両建物の中間的時期に位置する。柱穴の掘り方は一辺0.7~1.55mの長方形を呈し、柱痕は32~42cmの円形状を示している。

柱間は、南妻で東より2.2+2.1+2.1m、平均2.1mであり、東西の両柱列のそれも2.1mと考えられることより、この建物跡は7尺等間のものであるといえよう。

#### S B120建物跡 (第6図 第5・8・9図版)

J T~K B-62~64グリッドより検出された東西13間、南北1間の掘立柱建物跡であり、南北軸は、N-3°-E方向を示している。S B112建物跡に切られており、これに先行するものと考えられる。東妻は未調査であるが、これ以东には本建物に対応する掘り方がないので3間×1間





第5図 SB105 SB111

の東西棟とした。柱穴の掘り方は一辺0.96~1.35mほどの方形を呈し、柱痕は20~32cmの円形状であり南柱列にはすべて存在する。

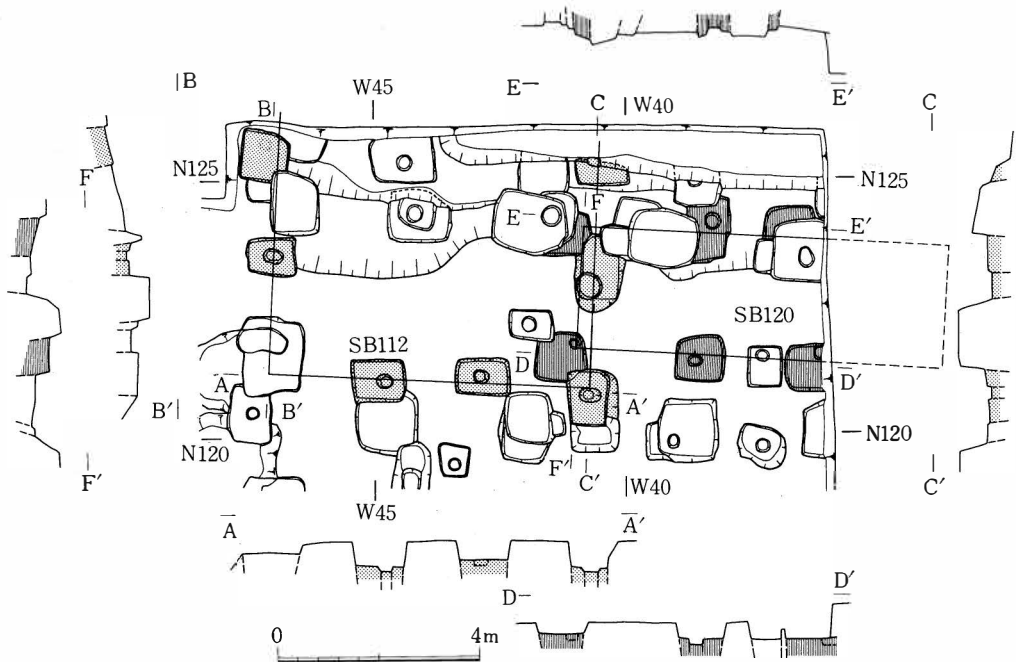
柱間は、南柱列で2.4+2.4mを計り、西妻のそれは2.45mと推定され、全体としては8尺等間の建物跡と考えられる。

## 第2節 一本柱列

SD106 (第4図 第3・4・6・7図版)

JR~KA-70・71グリッドより検出された南北に走る一本柱列で、3回の建替えがありA~Dの4時期がある。SA106Aは1m×1.3~1.4mの南北に長い柱穴でロームブロックとロームブロック混り黒色土が交互に埋められている。Bは東西に長い柱穴が見られ、ローム粒混り黒褐色土のみが、上部にはロームブロック混り土が埋められている。C・DはそれぞれSD104A・Bに対応する埋土である。

これらの4時期のうちA・B期は一本柱列のみのもので、柱間隔はAは柱穴中心で2m~2.2mである。Bは残存が悪く不明であるがAに近いものであろう。ともかくSA106A・BはSB104以前の時期は閉じた一本柱列だったと考えられる。この一本柱列は51年度調査のSB47・48の延長上にあり、方位はN-3.5°-Eを示している。



第6図 SB112・SB120

S A 100 (第12図)

J Q・J R-83グリッドより検出された一本柱列らしい柱穴列で、柱穴は約40cm×60cmの不整形で、抜き穴を伴っている。第8次で一部検出し、切り合いとしたのはこの抜き穴である。柱間隔は6尺か7尺であろう。

S A 121 (第7図)

J R~K A-68グリッドより検出された一本柱列跡で、柱穴は東西50cm~70cm、南北80cm~1.2mの長方形を呈しており、柱間隔は南より柱痕の中心で2.7m+2.7m+2.65m+約2.7mとなり9尺間と考えられる。方位はN-3°-EでS B 120と同方位を取っている。一部でS B 111の柱穴と接しているが、切合いは不明である。

S A 122 (第10図)

J J・J K-57グリッドより検出された南北に並ぶ3個の掘立柱柱穴である。1.1mの方形又は円形の柱穴で、3個とも柱痕は見られる。柱間隔は南より2.1m+2mであり7尺間と考えられる。方位はN-12.5°-Eであるが、東に延びて建物になるかも知れない。

第3節 溝 跡

S D 101 (第7・8図 第6図版)

K A-69・70グリッドより検出された大溝跡で、S A 106の東側に沿った溝跡である。南端はS B 104北妻の東柱の近くで終わっておりS D 125との間(S B 104の正面)は土橋状になっている。

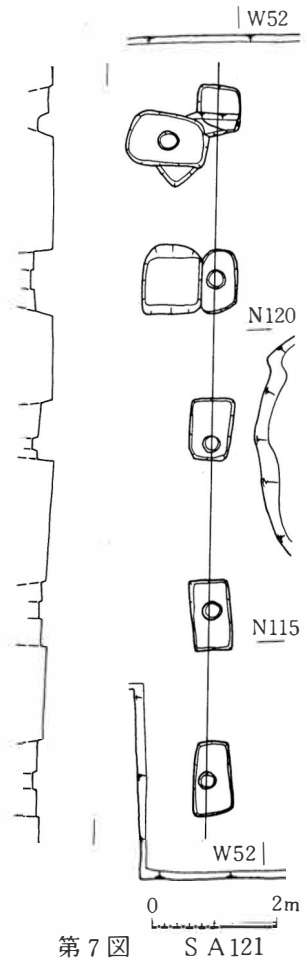
溝上半部の東半分、及び西壁の一部は耕作(l-1)及び後世の掘り込み(l-2)により攪乱を受け正確な上幅は不明であるが上幅約1.8m~2m、下幅95cm~65cm、深さ1.3mを測る「U」形の溝である。底面近くに若干残り東壁及び西壁に一部くい込んだ形になっているl-7は古い時期の溝の痕跡であろう。

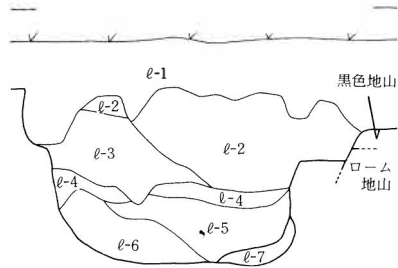
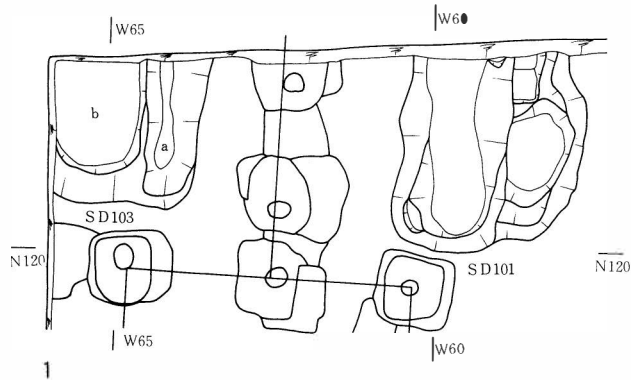
S D 103 (第7・8図 第6図版)

K A-71グリッドより検出された大溝跡で、S A 106の西側に沿った溝跡である。南端はSB 104北妻の西柱の近くで終わっておりS D 124との間は開いている。西壁の部分はグリッド外で不明であるが、東側はl-7の上で段が付いたような形を呈している。これは古い溝S D 103aが埋り切らない時点でl-7の上から新しいSD 103bを掘り込んだためこのような形になったものと考えられる。上幅は不明であるが約2.5m、l-7の上面では1.5m~1.6m、深さ1.5mを測る。堆積は自然堆積で、ある時点では溝が滞水していたらしい鉄分を含む粘土質土・砂質土がl-3~5に見られる。l-3・4は砂質土が多く、l-5は粘性が強いのでl-4とl-5の間で大きく上層・下層に分け遺物は取り上げた。

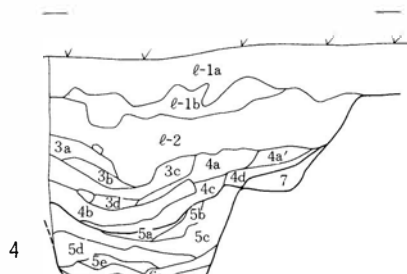
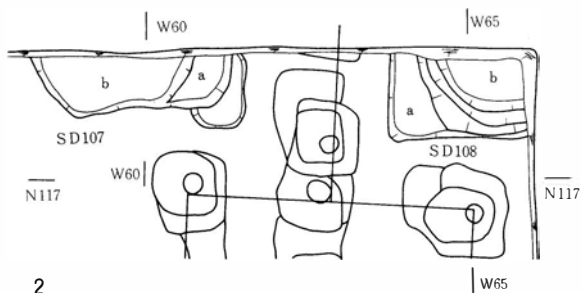
S D 108 (第7・8図)

J R-71グリッドより検出された大溝跡で、S A 106の西側に沿っている。西壁の部分はグリッ





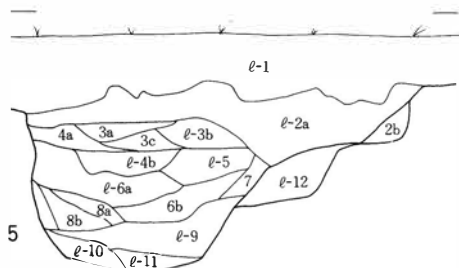
- l-1 耕作土 茶褐色、軟質(サラサラ)
- l-2 茶褐色土 木炭・ローム粒を含む、やや軟質
- l-3 黄茶褐色土 ローム粒子が多い、
- l-4 暗茶褐色土 黄色・黒色ブロックを含む  
やや硬質
- l-5 〃 黒色ブロック少ない
- l-6 黄褐色土 ロームブロックを含む、硬質
- l-7 暗褐色土 黒色ブロックを含む



0 4 m  
(1・2縮尺)

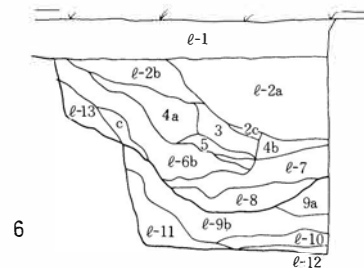
- l-1a・1b 茶褐色土 軟質, 1b は木炭を含む
- l-2 黄茶褐色土 ローム・木炭粒を多く含む
- l-3a・3b 灰褐色土 灰・木炭を含む, 3aはやや暗い
- l-3c・3d 〃 3c は砂分, 3d は鉄分が強い
- l-4a・4b 茶褐色土 l-2と同質, a' はロームブロックを含む
- l-4b 茶褐色土 灰・木炭・ローム・鉄分を含む
- l-4c 赤茶褐色土 砂分・酸化鉄分強し

- l-5a・5c 暗灰褐色土 木炭粒多し, 5c は鉄分強し
- l-5b 茶色土 軟質(フワフワ)
- l-5d・5e 暗灰褐色土, 5a より粘性・砂分多い
- l-6a 黄色ロームブロック混り黒褐色土
- l-6b 崩れロームブロック
- l-7 灰茶褐色土 ローム粒を含む、やや軟質



- l-1 耕作土
- l-2 暗褐色土 ローム粒を含むa・b・cと粒  
が大きくなる
- l-3 〃 ロームブロック・砂分を含む  
ロームブロックが最も多い
- l-4 〃 黒色土ブロックを含む
- l-5 〃 ローム粒子を含む
- l-6 灰褐色土

- l-7 黒色土 ローム粒子を含む
- l-8 黒色土 ロームブロックを含む, b は  
ブロックが多い
- l-9 暗褐色土 ローム粒子を含む
- l-10 黒色土
- l-11 暗灰褐色土
- l-12 暗褐色土



- l-1 耕作土
- l-2 暗茶褐色土 ローム粒子を含む, b は黄,  
c は灰がかかる
- l-3 暗黄褐色土 小ロームブロックを含む  
くすんだ暗黄褐色土
- l-4 〃 木炭・焼土を含む、硬質
- l-5 〃 ロームブロックを含む
- l-6 黒褐色土 ローム粒を含む
- l-7 暗黄色土
- l-8 〃
- l-9 くすんだ暗褐色土
- l-10 黒褐色土 鉄分を含む
- l-11 暗茶褐色土 ローム粒子を含む
- l-12 黄褐色土 白色粘土ブロックを含む
- l-13 くすんだ暗褐色土

0 2m  
(3~6縮尺)

第8図

1 SD101・SD103  
4 SD103セクション

2 SD124・SD125  
5 SD125セクション

3 SD101セクション  
6 SD124セクション

ド外だったため上幅、底幅は不明であるがSD103に近いものと推定される。東壁には段があり、SD103と同じように古い溝SD108aが埋まり切る前に $\ell$ -13の上から新しいSD-108を掘り込んだよのと考えられる。深さは1.5mを測り、堆積は自然堆積と考えられるが、 $\ell$ -8と $\ell$ -9の間に堆積の停滞があったらしい。

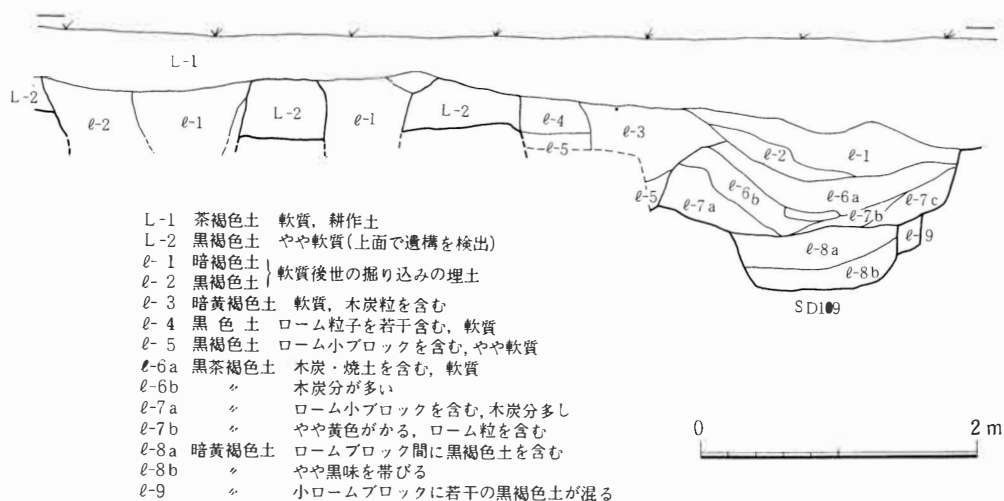
SD107 (第7・8図)

J R-69~70グリッドにかけて検出された大溝跡でS A106の東側に沿っており、SD101同様SB104の前面はと切れている。この溝も2時期あり古い溝SD107a ( $\ell$ -12) を切って新しいSD107bが掘り込まれている。SD107bは上幅1.8m~2m、底幅1.1m、深さ1.2mを測る。堆積は $\ell$ -3~ $\ell$ -11までは自然堆積と考えられる。なお $\ell$ -2bは古いピットの覆土である。

SD109 (第5図 第8・9図版)

KB-60~64グリッドより検出された溝跡で、上半部は後世のフワフワの覆土を有する溝状の掘り込みに切れ上幅は不明であるが底幅はKB-60グリッドで90cmを測る。この溝はSB111・120を切っているのので少なくともこの検出面もしくはその上から掘り込まれているので深さは1.2m近くはあったと考えられる。溝中からは9世紀頃と考えられる土師器が多く出土し、杯には、「白」「厨」(第20図)などの墨書があるものがある。

溝の上の軟質の覆土を有する溝状掘り込み( $\ell$ -1~ $\ell$ -8)は、これを除去した段階で建物跡を検出することができるので、これら遺構群よりは新しいものと考えられる。



第9図 SD109付近セクション(KA~KB-60グリッド西壁)

S D102・118 (第10図 第10・11図版)  
 南北に長い第2トレンチからは多数の  
 ピットと共に2条の溝跡 (S D102・118)  
 が検出されている。2条はほぼ平行しな  
 がら南北方向に走り、さらに調査区外へ  
 と伸びている。幅はS D102が上端で1.4  
 ~1.7m, S D118が1.8~2.3m, 底面幅  
 は各々30~50cm, 20~50cm, 深さ約1.7m  
 と規模的にはほぼ等しい。また、断面形は  
 共に箱葉研形を呈する。覆土は自然堆積  
 を呈し、4層~5層に大別される。各層  
 にはいずれもローム粒, ロームブロック  
 の混入がみとめられる。出土遺物は極め  
 て少なく, S D102の覆土中から常滑系  
 の陶器が1点, また上層からは馬歯が数  
 点出土している。S D108・112の両者は  
 規模, 断面形, 堆積状況, 走行方向など  
 に共通点がみられ, 同時に機能していた  
 可能性をもっている。

#### 第4節 土 拡

##### S K110 (第10図 第11図版)

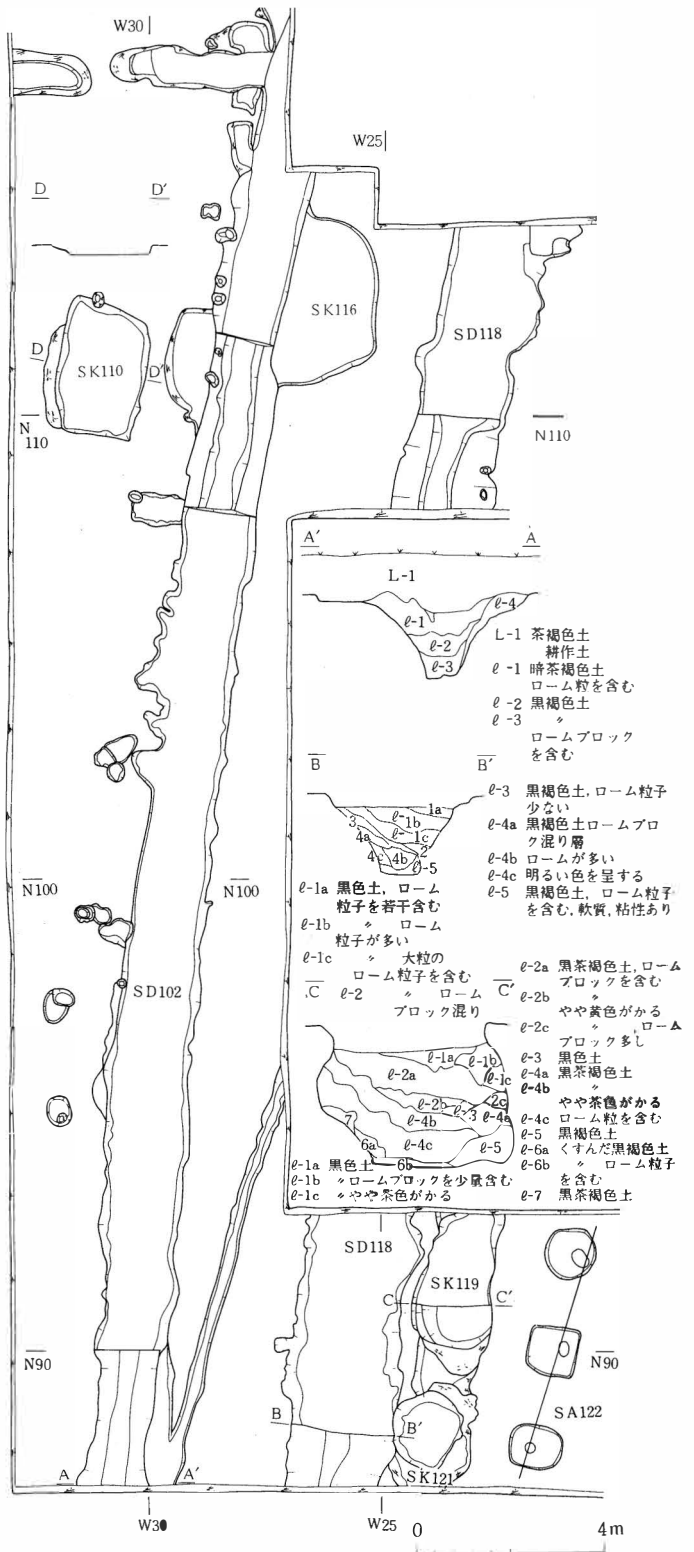
J R-60グリッドから検出されたピット  
 で, 2.7m×1.9mの南北に長い不整形  
 のプランを有し, 深さは約20cmである。  
 覆土は黒褐色のやや軟質土で, 中からほ  
 ぼ完形の長頸壺 (第21図) が1点出土し  
 ている。

##### S K113・114・116 (第5図)

J T~K B-59・60グリッドより検出  
 された径2.5m~3.5mの不整形のピット  
 で, S K113はS B111を, S K114はS K  
 116を, S K114・116はS D109の上の軟  
 質土の掘り込みを切っており, 新しい時期  
 のピットと考えられる。性格は不明。

##### S K119・121 (第10図)

調査区の南端には溝跡と並びS K119・

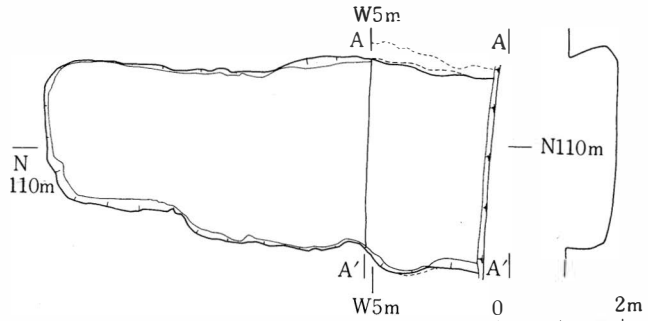


第10図 S D102・118 S K110・119・121 S A122

121が検出されている。S K 119は不整楕円形を呈し長径2.8m以上，短径1.7m，深さは約1.5mを測る。壁はオーバーハングしており，底面は平坦である。覆土にはローム粒が全体的に混入し，層序は自然堆積を呈する。遺物の出土はみられなかった。S K 119と共に採土用の土壌と考えられる。

S K 117 (第11図 第121図版)

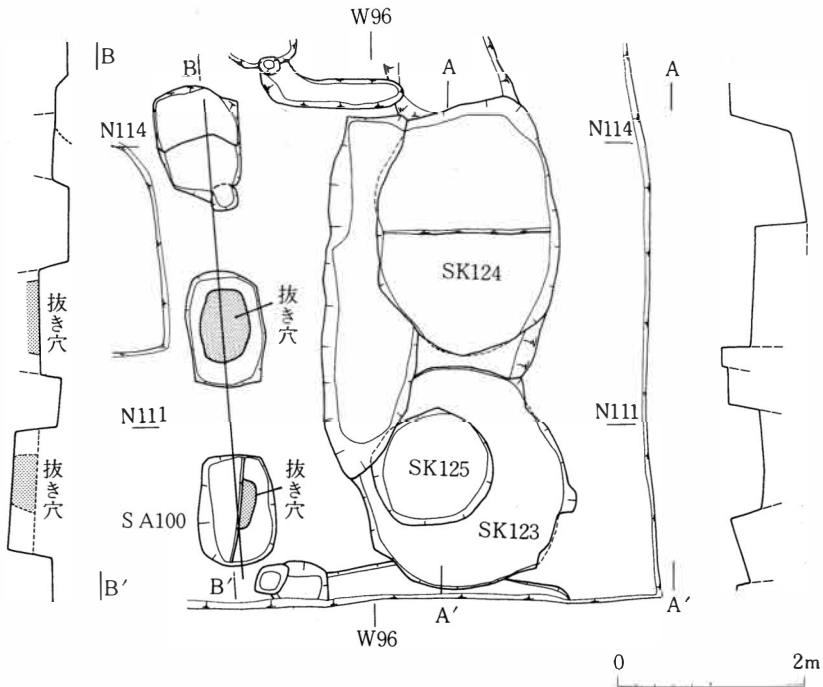
J Q・J R-52~54グリッドより検出された上幅3.3m，下幅3m，深さ80cm，長さ7 m以上の溝状のピットで，壁の一部はオーバーハングしている。覆土はほぼ黒一色の軟質土で，底面，壁面近くに一部ロームの大ブロックが見られる。土取り穴と考えられるものである。



第11図 S K 117

S K 123・124・125 (12図)

S K 123・S A 100の東側J Q-82グリッドより検出された2.1m×2.2mのややゆがんだ円形のピットで，東壁の一部はオーバーハングしている。覆土はローム小ブロックを含む軟質黄褐色土である。



第12図 S A 100 S K 123・124・125

S K124, S K123の北J R-82グリッドより検出された1.95m×2.4mの南北に長い楕円形のピットで、南壁と西壁の一部がオーバーハングしており、深さは42cmを測る。覆土はS K123と同様のものであるがやや暗い色をしている。

S K125, S K123を切っている62cm×65cmの円形のピットで、覆土はローム粒を含む粒性ある軟質茶褐色土である。

## 第3章 出土遺物

### 第1節 瓦 (第13~17図)

今回の調査では瓦は217点出土し、そのうち軒平瓦が3点、平瓦153点、丸瓦28点、不明33点となっている。

#### 軒平瓦 (第13図)

3点のうち2点は関和久遺跡Ⅰの分類によれば(以下瓦の分類は「関和久遺跡Ⅰ」による)重弧文軒平瓦第一類で、瓦当面にロクロ引き重弧文を有するものである。他の1点も顎の部分の調整からして同じものと考えられる。このうち1点(第13図2)はS D102より出土している。

#### 平瓦 (第14~16図)

153点のうち第Ⅰ類が18点、第Ⅱ類が11点、第Ⅲ類が38点、第Ⅴ類が47点、第Ⅵ類が21点、第Ⅶ類が16点となっている。

遺構別ではS D109が第Ⅰ類1点、第3類4点、第6類4点、第Ⅶ類1点、S D102が第1類1点、第Ⅳ類4点、S D101が第Ⅲ類2点、S D103が第Ⅲ類2点、第Ⅵ類1点、第Ⅶ類1点と溝から多く出土している。建物跡ではS B104の柱穴で第Ⅲ類1点、S B105の柱穴で第Ⅵ類が1点出土している。一本柱列ではS A106Cより第Ⅲ類が1点、S A106Dより第7類が1点出土しており、建物、一本柱列からはあまり多くはない。

#### 丸瓦 (第17図)

丸瓦は28点出土しており、遺構からはS D109から8点、S D103から5点、S B105から1点出土している。これらは全て破片であり全体の形を知り得るものはなかったが、行基葺きと考えられるものの破片が2点(第17図1・2) S D109より出土している。

### 第2節 土師器 (第18~22図 第13~15図版)

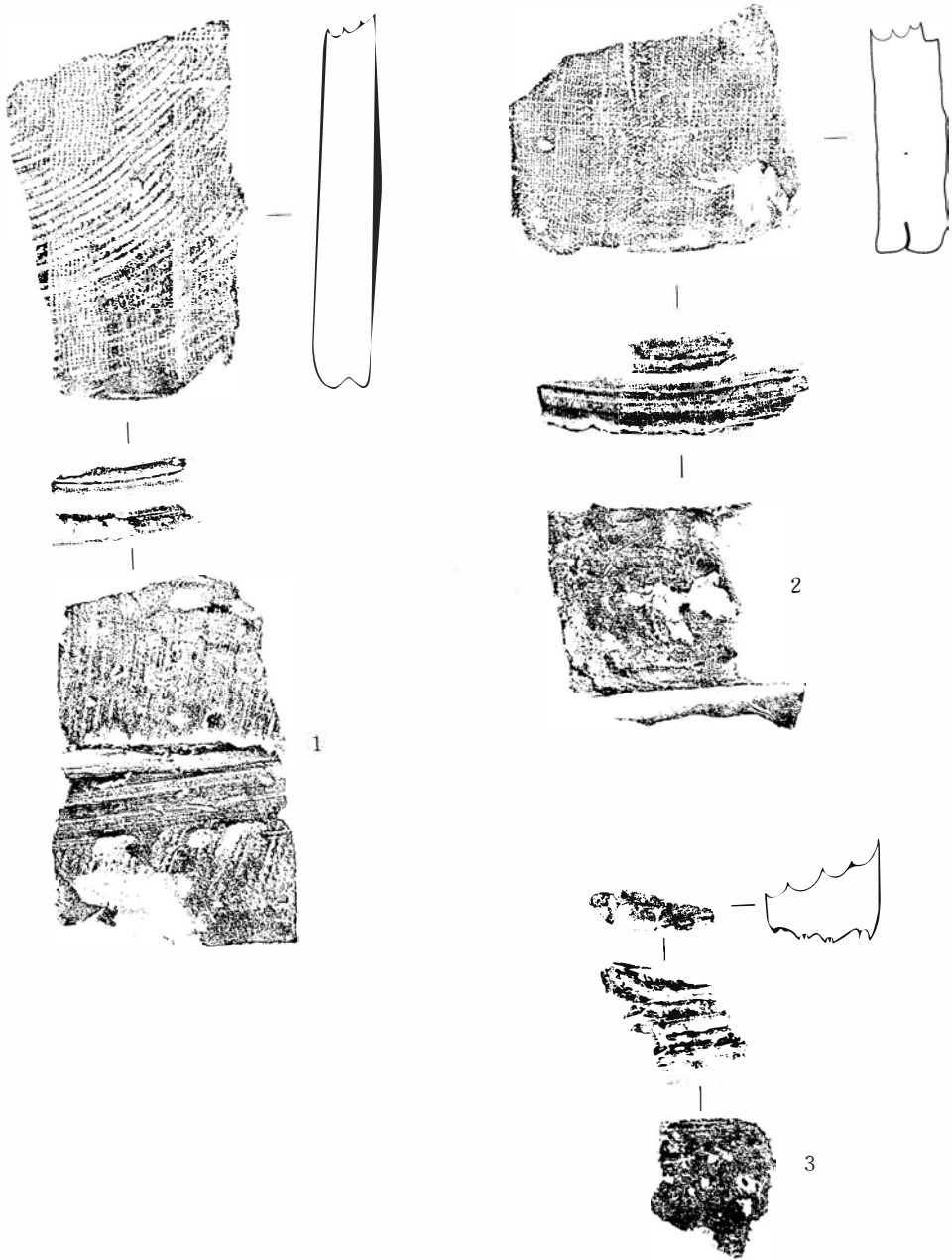
出土遺物で一番量の多いのは土師器であった。甕はロクロ調整のものと、ロクロを用いないものが混っているが、杯はほとんどがロクロ調整で、ロクロを用いないものは表土から若干出土と、S D103より1片出土したのみであった。

S B104B建物の柱穴からはロクロ土師器杯1類・2類、須恵系土器らしきものの破片が出土しているが、実測できるものはなかった。

S A106Dからはロクロ土師器杯1類、S A106Cからは国分寺下層式らしい破片が1点ずつ出土しているが、小片のため実測はできなかった。

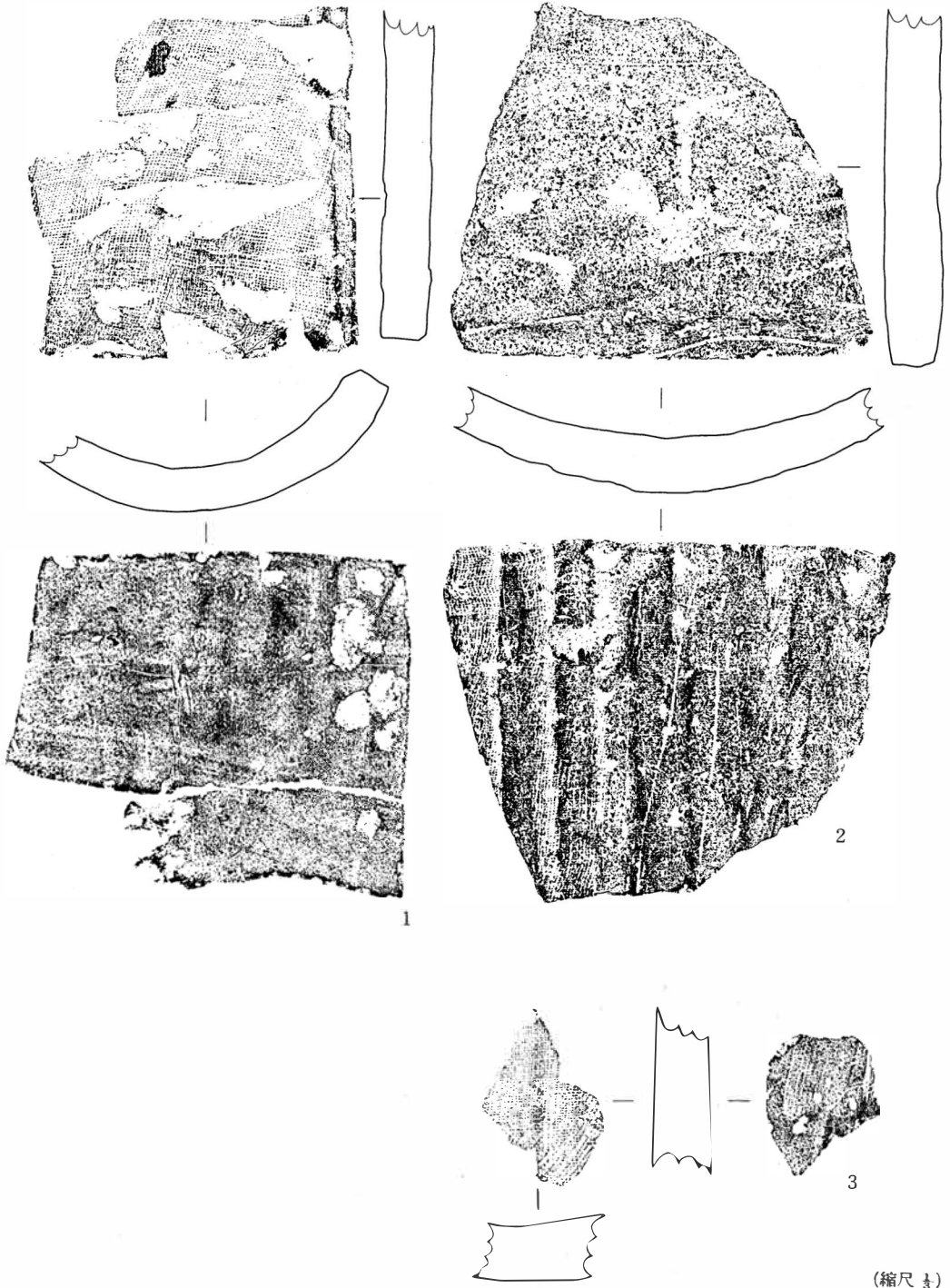
S D101からはロクロ土師器杯1類・2類・5b類が出土しており「上」(2類)(第18図1)、「文」





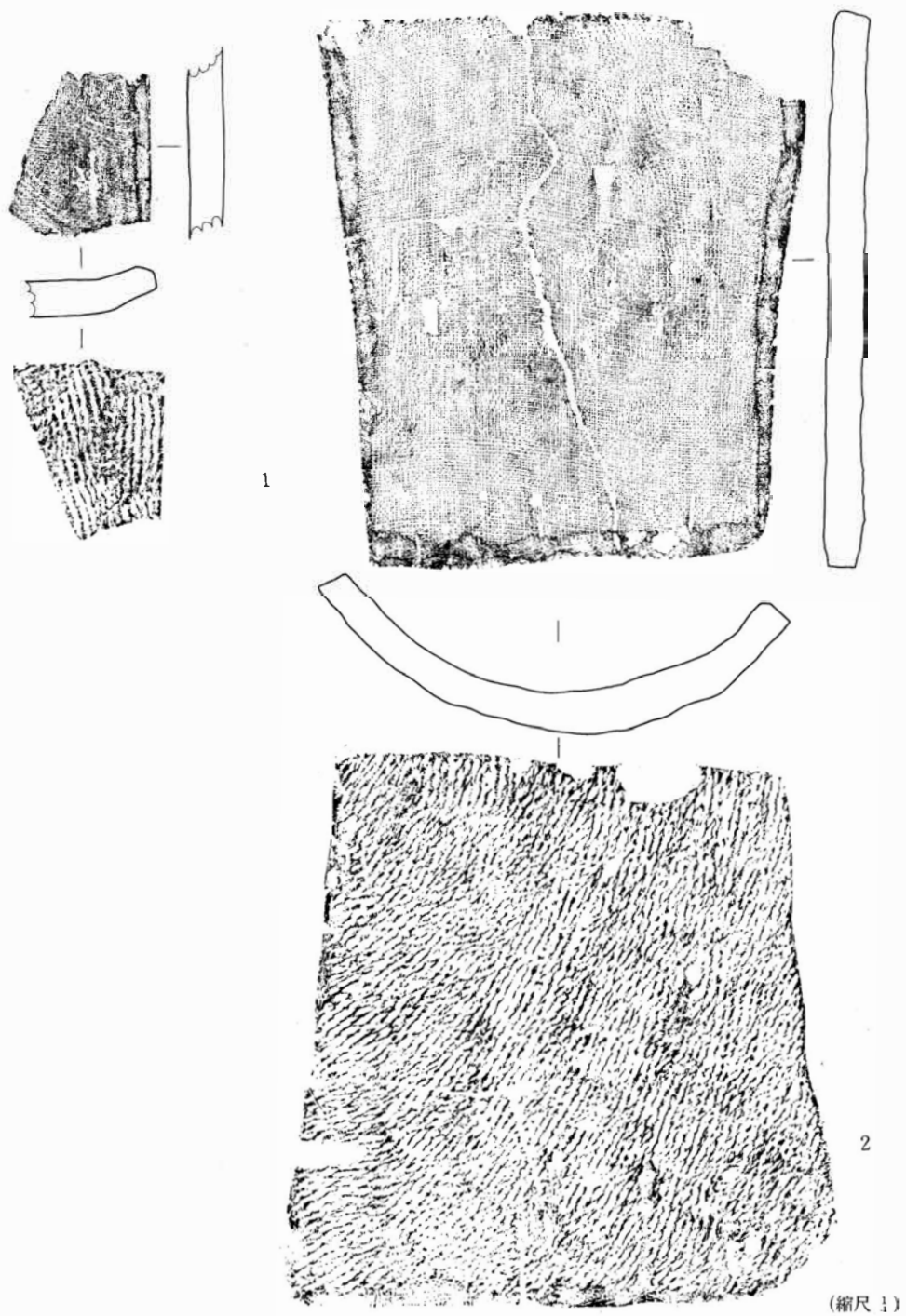
(縮尺  $\frac{1}{3}$ )

第13図 軒平瓦 1・3 表土出土 2 SD102出土

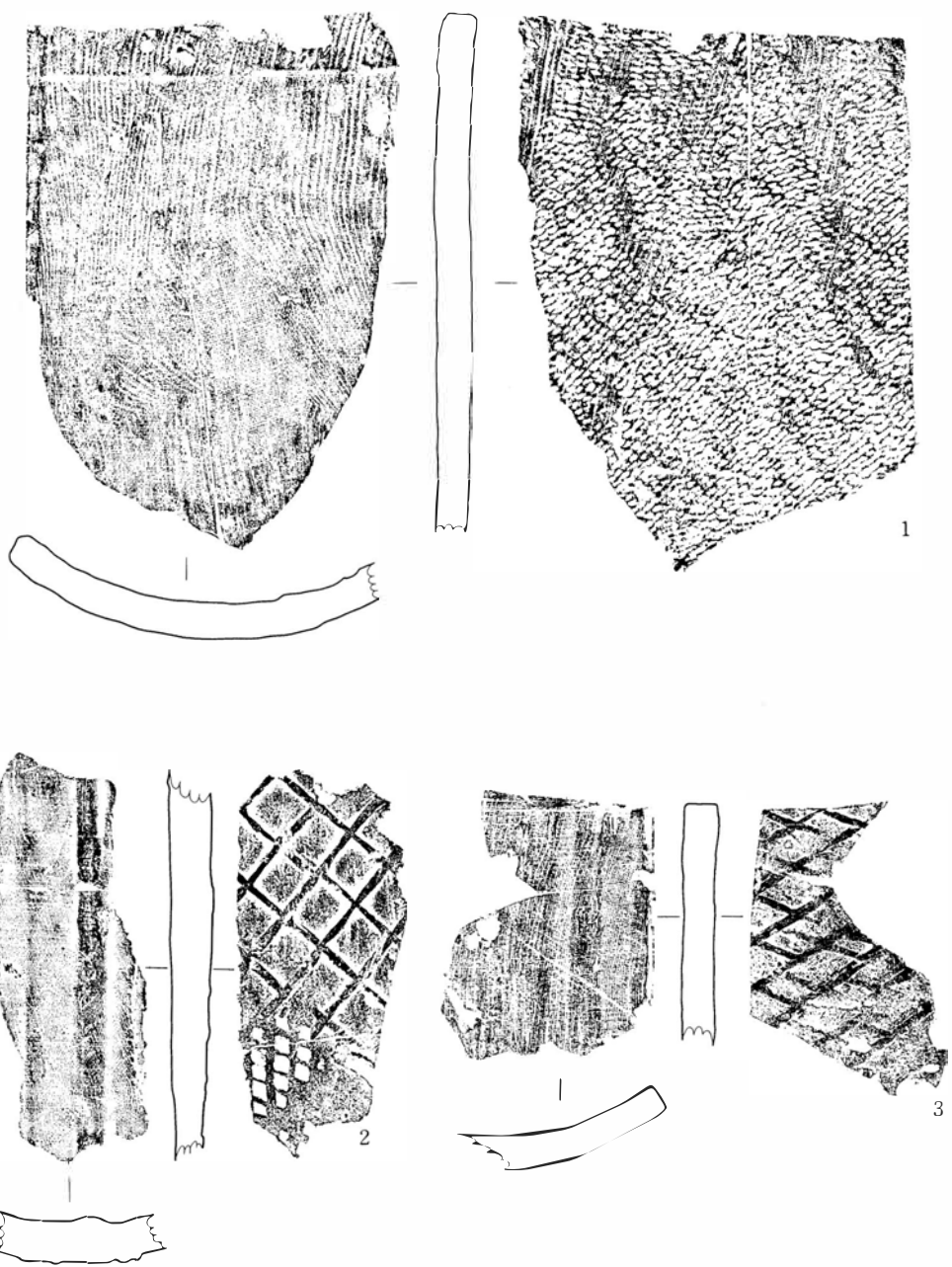


(縮尺  $\frac{1}{3}$ )

第14図 平瓦 1 SD109出土 2 表土出土 3 SD103出土  
 1 第1類 2・3 第2類

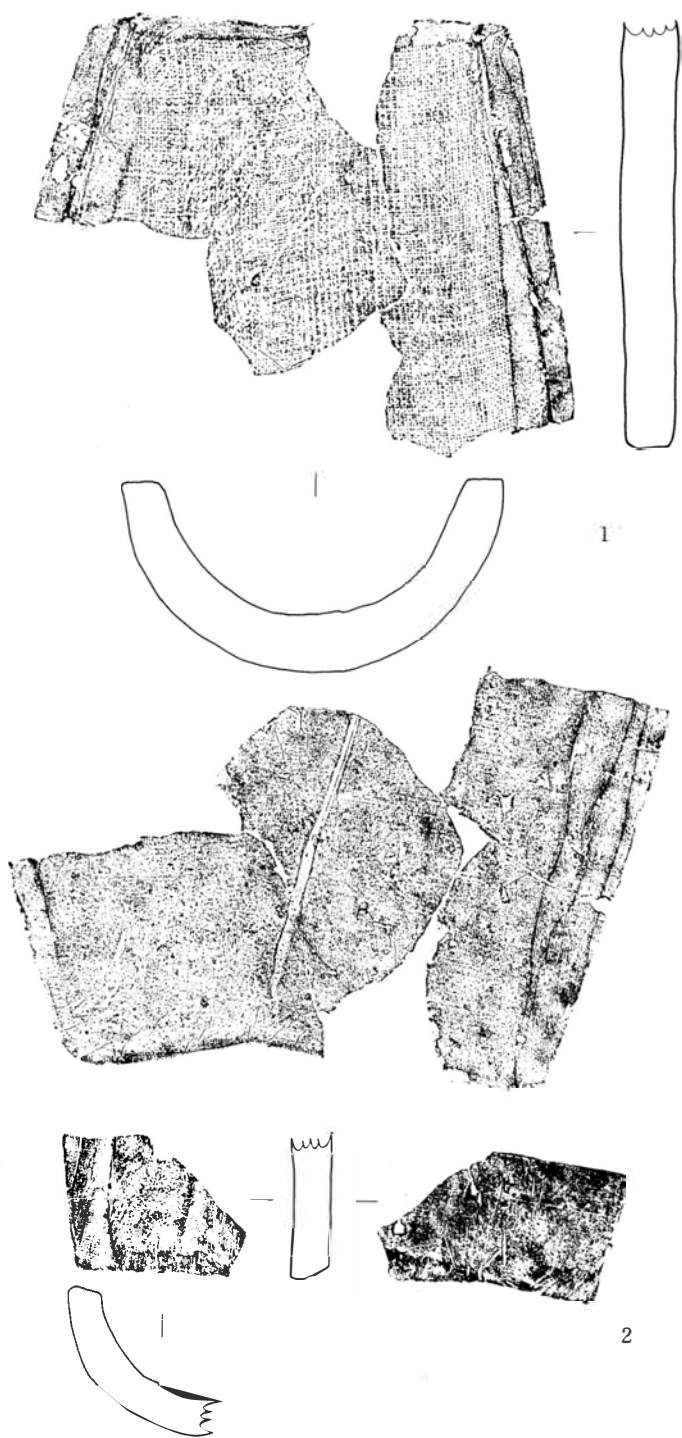


第15図 平瓦 1 SK114出土 2 SK116出土  
1・2 第5類



(縮尺  $\frac{1}{4}$ )

第16図 平瓦 1 表土出土 2 SD109出土 3 表土出土  
 1 第5類 2・3 第7類



第17図 丸瓦 1・2 S D109出土

(縮尺 1/3)

(5b類)(第18図3)の墨書がある。

SD103は土器が多く出土し、杯は国分寺下層式の破片・ロクロ土師器杯1類・2類・3c類・5b類と種類も多く、1類では小形(第18図5)のものもある。墨書は「馬鞆(?)家」(第18図4)、「白」(第18図6・7)、「古」(第18図8)、「厨」(第18図9)、「白」「守」の習書のあるもの(第18図10)が出土している。

SD107からはロクロ土師器杯1類・2類・5b類・黒色・表面ミガキの耳皿が出土している。底部に「立」の墨書のあるもの(2類)(第18図12)が出土している。

SD109上面ではロクロ土師器杯1類(第19図1)・2類(第19図2)・5b類(第19図3)、SD109では1類(第19図6～11・第20図1～3)・2類が多量に出土している。墨書は「白」(第19図1・9 第20図2・3)、「厨」(第20図1)、「水流」(第19図10)、「八十」(第19図11)、「李」(第19図4)が出土している。

甕は良好なものはないがSK113からは器形を知り得るものが出土している。ロクロ調整で、内面はミガキと内黒で、体部下端にもミガキが見られる。

表土からは「屋代」(第22図1)、「在=恠?」の破片のある墨書の杯が出土している。

### 第3節 須恵器・その他 (第20・21図)

遺構出土の須恵器で器形の判明したものはSB105, SD101・109上面, SK110のもののみである。

SB105の柱穴埋土出土の杯(第21図1)は回転ヘラ切りの底の小さなもので5a類である。体部に「白?」の墨書がある。

SD101出土の杯(第21図2)は底面に手持ちヘラ削り再調整のある2類で焼成は良好である。

SD109からは回転ヘラ削りのある底面の大きな1類の杯(第21図3)、長頸壺の頸部(第21図4)が出土している。

SK110からは、ほぼ1個分の長頸壺(第21図5)が出土しており、倒卵形の体部、細い頸を有し、頸部と体部の間に痕跡的リング状の高まりがある。これに伴って内黒のロクロ土師器杯1類の破片が出土している。

表土出土で器形の知り得たものは返りのある蓋(第21図7)、5b類の杯で底径の小さいもの(第20図8)、底径の大きいもの(第20図9)がある。その他に灰釉陶器(第21図6)、緑釉陶器の破片などがある。

硯 (第20図5・6)

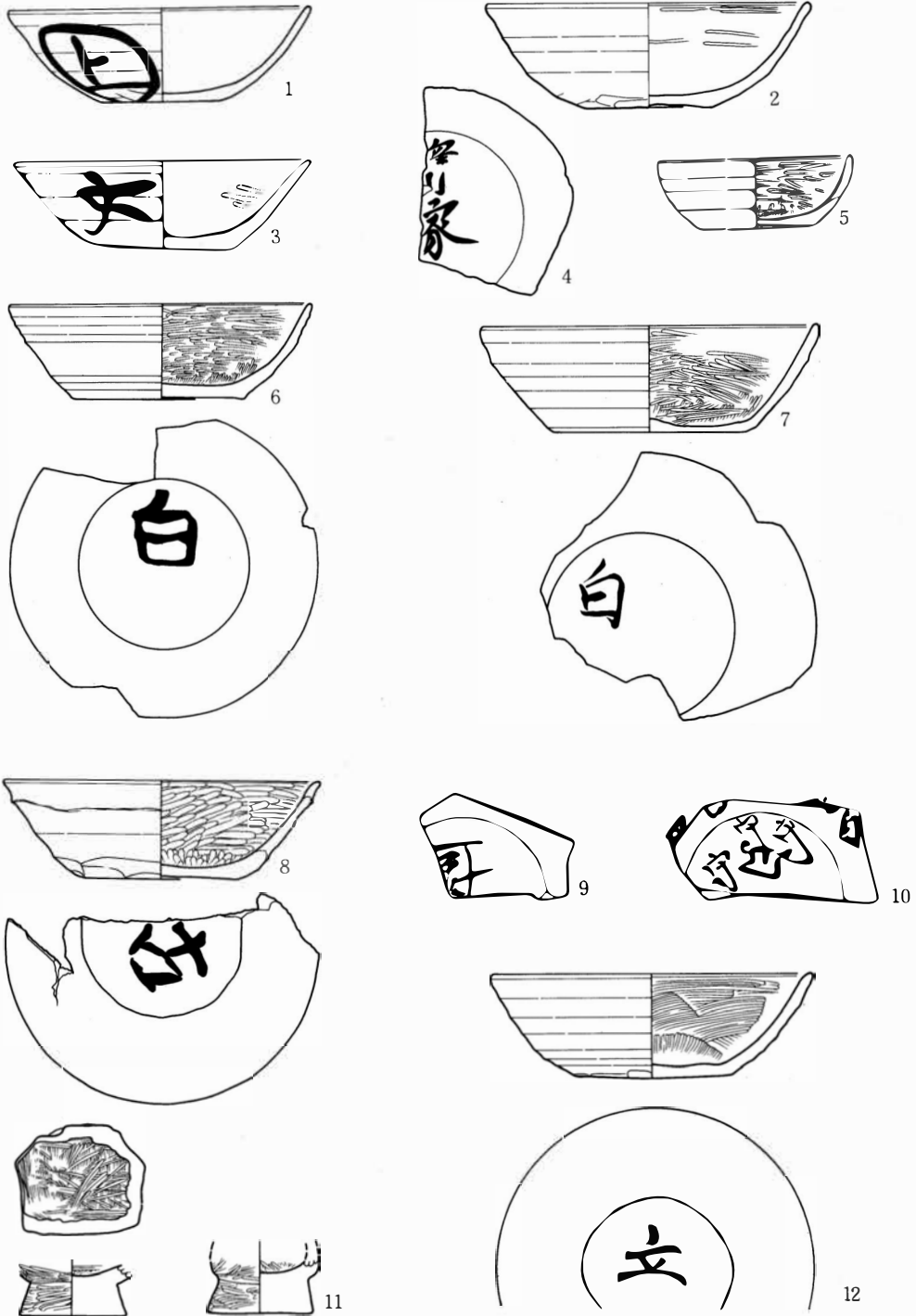
円面硯の脚部破片がSB105とSD103で出土している。

SB105出土のもの(第20図5)は推定で底部18cm、上面14cm、高さ8cmの比較的小形のもので、脚のスカシは長方形のものが4個所にあると考えられる。

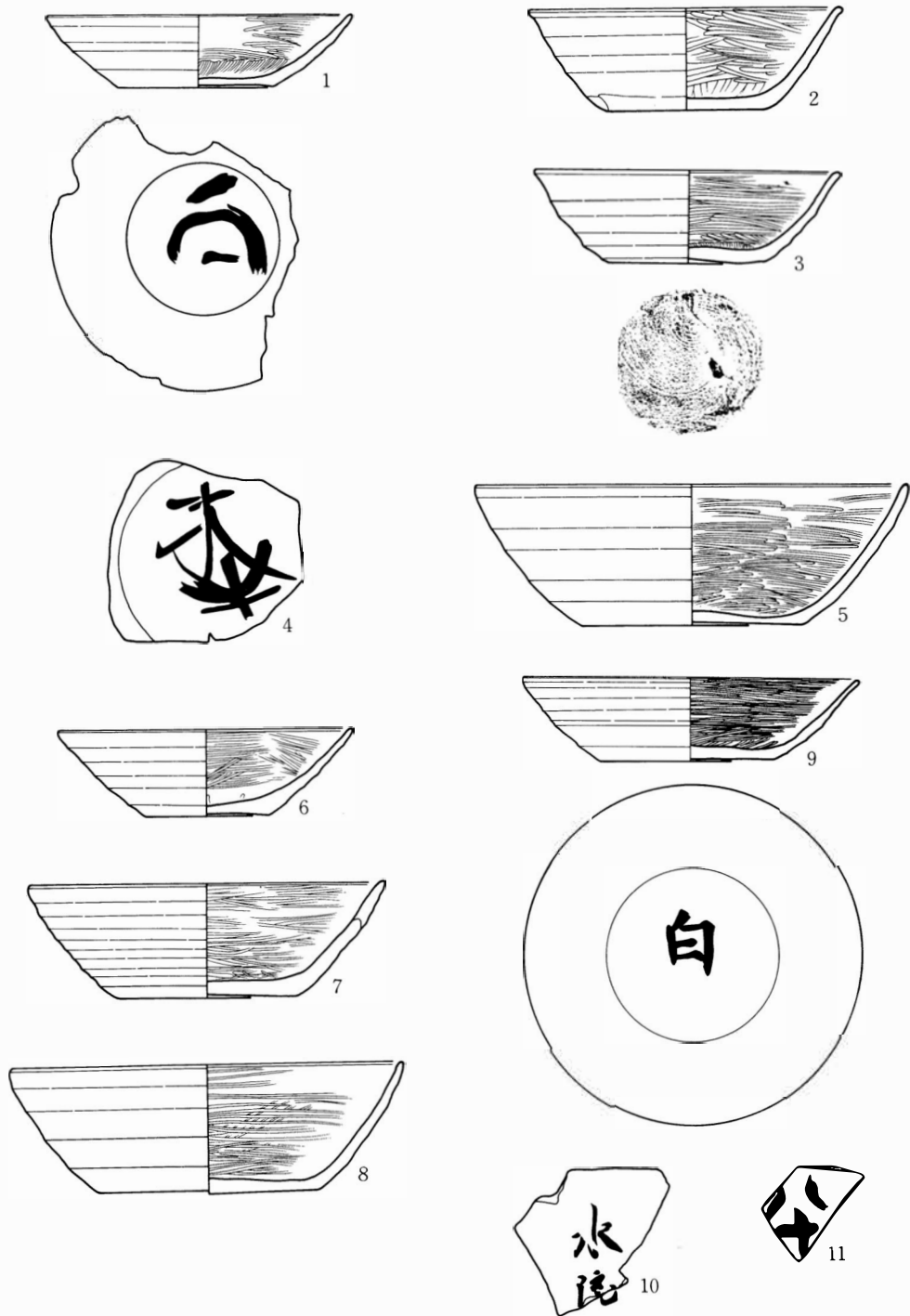


第22図 1・2 表土出土  
1・2 土師器杯片

SD103出土のもの(第20図5)は大形のもので推定で底径25cm、高さ14cm以上あり、脚部には4個所の長方形のスカシと縦方向のスリット状の沈線がある。内側には墨の付着した跡がある。



第18図 1~3 SD101出土 4~10 SD103出土 11·12 SD107出土 (縮尺 1/3)  
 1~10 12 土師器杯 11 土師器耳皿

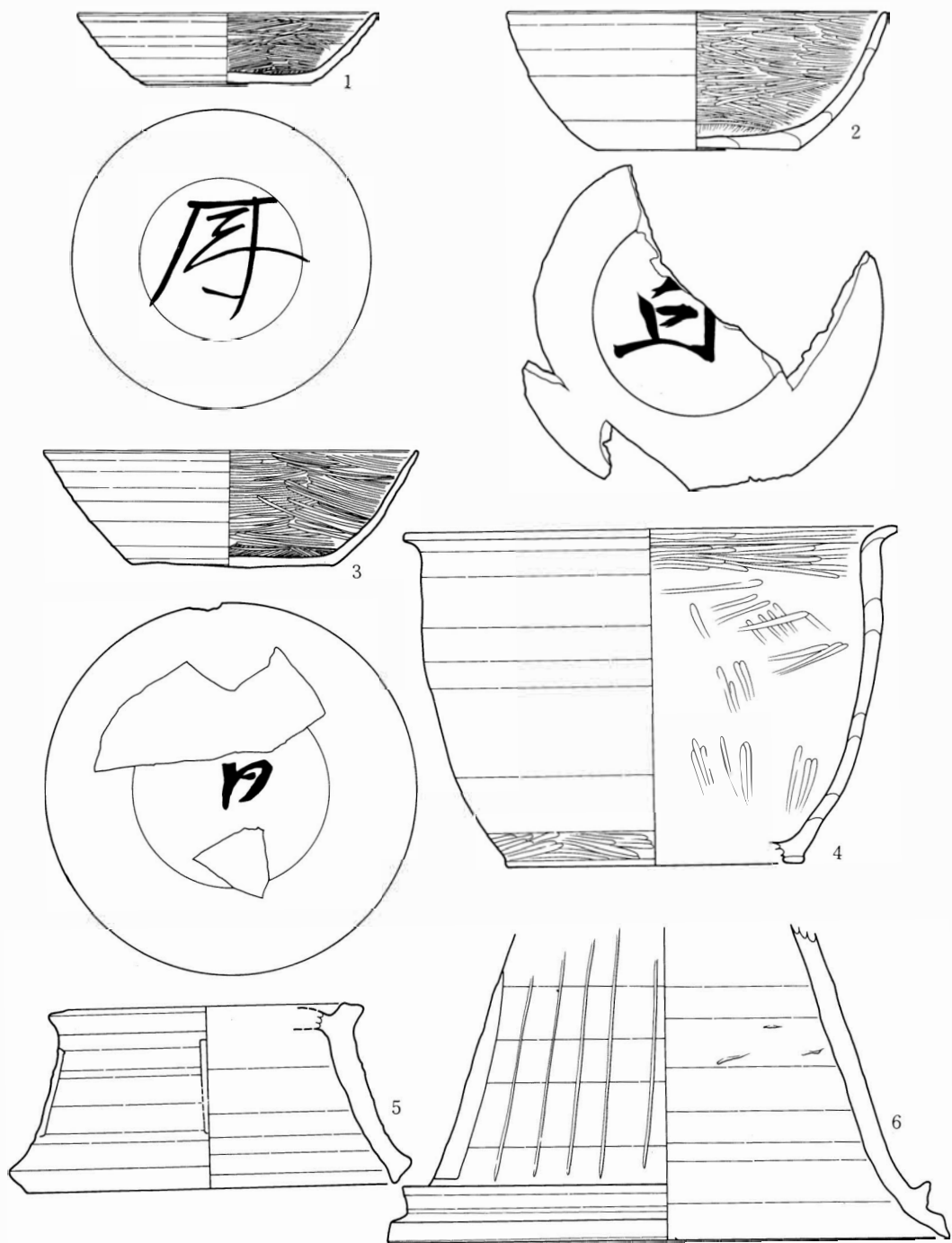


第19図 1~5 S D109上層出土  
1~11 土師器杯

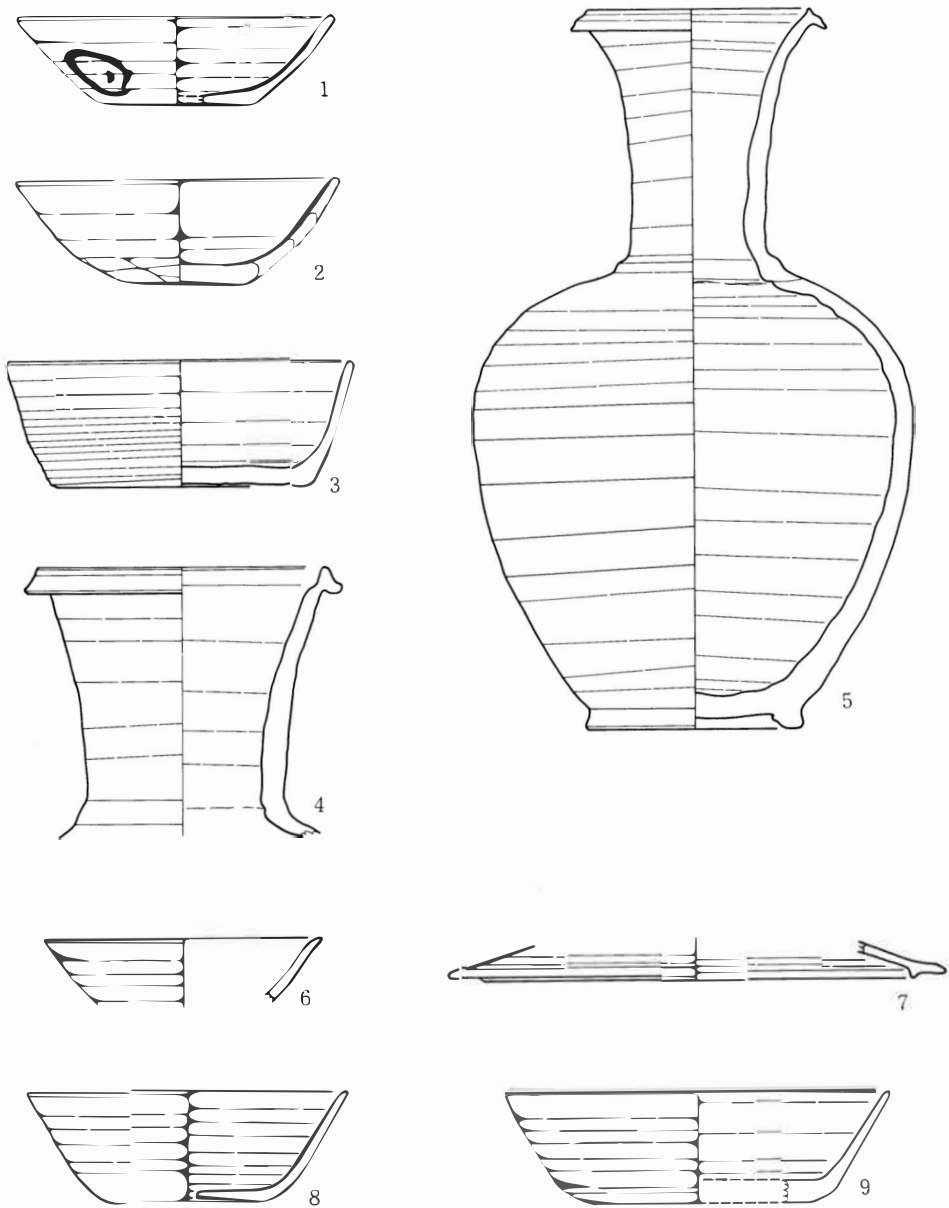
6~11 S D109出土

(縮尺  $\frac{1}{2}$ )





第20図 1~3 SD109出土 4 SK113出土 5 SB105出土 6 SD103出土  
 1~3 土師器杯 4 土師器甕 5・6 円面碗 (縮尺  $\frac{1}{3}$ )



(縮尺 1/3)

第21図 1 SD105出土 2 SD101出土 3・4 SD109上層出土  
 5 SK110出土 6~9 表土出土  
 1~3・8・9 須恵器杯 4・5 須恵器長頸壺 6 灰釉陶器 7 須恵器蓋

## 第4章 考察

### 第1節 遺構

本年度の発掘で検出された遺構は第2章で述べたように掘立建物跡5、一本柱柵列4、遺跡7、土壇10である。

掘立建物跡S B104は桁行3間6.4m(21尺)、梁行2間4.54m(15尺)の東面した八脚門で、その桂間は桁行は5.5+10+5.5尺、梁行は7.5+7.5尺であったと思われる。八脚門は古代の地方官衙、寺院にはもっとも多く見られる門で、東北でも陸奥国府である多賀城、平安時代の出羽国府と見られている城輪柵跡をはじめとして、胆沢城跡、徳丹城跡、志波城跡に擬定されている盛岡市太田方八丁遺跡、陸奥国加美郡家跡かと思われる宮城県中新田町の城生柵跡、多賀城廃寺跡、陸奥国分寺跡などにその例があるが、関和久遺跡で八脚門跡が発見されたのは9年間の発掘を通じて今回が最初である。この門はその妻の中央の柱にとり付いている柵列SA106の南への延長が約33mのところまで西に折れてSA83となり、西側を南北に走るSA100とともに中にある建物群を囲んでいるところから、この建物群中でもっとも大きいS B91、あるいはS B90を盟主とする建物群のある一区画(院)の東門であろう。しかも注意すべきことはこの区域の南門S B81より大きいことである。昨年発見された南門S B81は桁行1間3m(10尺)、奥行2間3.6m(12尺)の小さい門にすぎなかった。東門がもっとも大きいということは、これがこの院の正門であったことを意味する。

しかしこの門は最初から柵列SA106に伴っていたものではなく、第2章第2節に述べてあるようにSA106Cの時に出来たものである。その時期はこの門の一番古い掘り方から回転ヘラ削り、再調整のある内黒の土師器が出ていることから9世紀以後と考えられる。これに対して柵列SA106A・Bはその掘り方からは国分寺下層式の土師器破片が出ているから8世紀に溯るものである。このように8世紀には東門はなく、ここに柵が通っていたとすれば、この院への出入はどこからしたであろうか。院の南側の柵には四脚門S B81があるが、この門はいまのところその出土土器から10世紀以降のものと考えられるから、それ以前はS B81に近い位置に柵列SA83に控柱のない幅10尺の柵門があって、そこが出入口であったと考えられるのである。柵列106と平行して東側に存在する遺跡SD101・107、西側に存在するSD103・103は八脚門の前後はとぎれて通行可能になっている。おそらくこの溝はS B104がつくられた時に掘られたものであろう。

S B104以外の本年発掘された建物はすべてS B104の東にあり、すべて重複していて時期を異にして存在したものであることが明らかである。その新旧の順序が、SB120→SB111→SB112→SB105であることは前章第2節に述べられている。その中で注目すべきものはS B111とS B105である。

S B111は桁行9間約29m(95尺)、梁間2間4.88m(16尺)の細長い東西棟で、屋根は切妻であったろう。このように梁行が2間で、桁行が9間を越える長大な建物で、しかも内部の棟通りの柱跡を欠いているものは、平城宮内裏外郭の官衙地区にあるS B540(桁行18間、52.33m、梁行2間5.88m、東西棟)を最大として、下野国府東・西脇殿(桁行13間44.8m、梁行2間4.8m、南北棟)、平城宮内大膳職跡のS B143(桁行13間39.39、梁行2間6.06m、東西棟)内裏北裏官衙地区のS B585(桁行13間

38.35m, 梁行2間5.9m, 南北棟), 伯耆国府東・西脇殿(桁行13間37.05m, 梁行2間6.06m, 東西棟), 美作国久米郡家跡とされている岡山県久米郡宮尾遺跡の建物Ⅰ(桁行12間約27m, 梁行2間約3.8m, 東西棟), 同国勝田郡家跡と推定されている岡山県勝田郡勝間田遺跡の建物Ⅰ(東西棟)、Ⅲ, Ⅳ建物(桁行9間約20m, 梁行2間約5m, 南北棟), 筑後国御原郡家跡とされている福岡県小郡市小郡遺跡の807・808建物(桁行9間23.4m, 梁行2間5.2m, 東南向)などが知られており, 東北でも関和久の他に本年発掘され, 玉造柵跡と推定されている宮城県古川市の名生館遺跡のS B05(桁行9間20.5m以上, 梁行2間3.6m, 南北棟)がある。多くは国府, 郡家など地方官衙遺跡の中枢部に位置する建物跡である。『上野国交替実録帳』の新田郡の郡庁のところに「西長屋」, 「南長屋」とあるのはこのような細長い建物を指したものであったかも知れない。

S B105は東妻の柱穴が農道の下になっているらしく, その位置の確認はできなかったが, 農道以東にははみ出していないから桁行5間約13m(43尺), 梁行3間8.5m(28尺)南廂付ぐらいの建物と見てよいであろう。関和久で廂付の建物跡が発見されたのもこれがはじめてである。5間2間の身舎に片廂のついた建物跡は平城宮大膳職跡のS B285(13.37m×9.50m, 南北棟), SB413(11.88m×8.52m, 東西棟)などに見られるところであるが, 地方官衙では多賀城でもっとも重要な建物である政庁政殿は第Ⅱ期(8世紀後半, 780A・D以前)以後は7間4間の礎石建物に改まっているが, 第Ⅰ期には桁行5間19.3m, 梁行2間5.9mの身舎に幅3.25mの庇がついた掘立建物であった。郡家で駿河国志太郡家跡であることが間違いない静岡県藤枝市御子ヶ谷遺跡中での最大面積をもつ建物であり, しかも柵列によって囲まれていて, 郡家においてももっとも重要な建物すなわち郡庁であったと思われるS B20が5間8.95m, 3間6.75m南廂付の建物である。これで見ると5間3間片廂付というものも地方官衙では格の高い建物であったらしい。

時期を異にするとはいえ, 関和久でいままで発見されたもののうち最大のS B111および唯一の南廂付の建物S B105がこの地区にあることはこの地域に関和久遺跡, すなわち白河郡家で重要な位置を占める庁舎のあったことを示している。この附近から白河郡を意味するものと思われる「白」の墨書のある土師器が多量に出土することもこの附近が白河郡家の中枢であったことを示している。昨年度の概報では関和久遺跡の南北中軸線上に南門をもつ柵列によって取囲まれた建物SB91・90などをもって郡の政治を行なった郡庁跡である可能性あるものとしたが, 本年度の発掘によってSB91・90より大きいSB111および関和久遺跡において唯一の南廂付建物が検出されたことによって, こちらのほうが郡庁跡である可能性が強くなった。SB91・90などのある一画(院)の東門SB104が八脚門で南門よりも大きいことも東側からの出入が重んぜられたためと解するならば, その門の東に位置する大きな建物こそ郡庁の建物たるに適わしい。SB105は今年度発掘地域内のもっとも新しい建物であるが, その時期は八脚門SB104Aのつくられた時期とほぼ同じであることが出土器によって知られる。

S B105の西側を南北に走る柵列S A121は柱間2.7m(9尺)等間隔の1本柱列であるが, 南北端がまだ発掘されていないので, 単なる目隠堀的なものか, あるいは柵列S A106にほぼ平行し, 南北において東に折れて, S B105・111などの建物を囲んだ柵であったのかまだ判明していないし, 切合がないのでまだ時代も不明である。将来の発掘によって, これが東北に折れまがってS B105などを囲む柵の一部である事が判れば, 柵によって囲まれた区域を集解儀制令五行條に郡院とあるものに比定することが出来よう。

## 第2節 出土遺物

瓦 今年の調査で比較的まとまった量があるのは平瓦のみであるが、その量を見るとⅢ類とⅤ類とで153点中85点と半分以上を占める点は昨年の第8次の地点と同じ傾向を示すが、平瓦のみでも昨年の約2.5倍、総量で約2.7倍と面積に較べ多くなっている。

また総量217点中約130点が第1トレンチとその付近から出土しており、建物の集中地点に比較的瓦が多く分布していると考えてさしつかえないであろう。

焼け瓦はⅢ・Ⅴ・Ⅶ類に多く見られるが、これは出土量に関係があると思われる。

土器類 今年度調査地区からは土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、須恵系土器らしきものが出土している。量的には土師器が多く、須恵器がそれに次ぎ、その他はほんの少量である。

土師器で器形が判明したのはほとんどが杯で、これらは大部分が内黒・ロクロ調整で、表杉入式のもので平安時代に属するものである。それに一部で国分寺下層式が見られる程度である。

遺構出土の土師器は主にS D101・103・107・109と溝に多く見られ、しかも杯が多い。これらを技法別に見るとS D101では1・2・5b類、S D103では1・2・3c・5b類、S D107では1・2・5b類、S D109上面では1・2・5b類、S D109では1・2類がある。しかもこれらのうち1類が多く、2類がそれに次ぎ、3c・5b類はかなり少なくなっている。この土器のうち、1類、及び2類の一部の組合せは9世紀前半頃の時期と考えられるものであり(註1)、3c類もこの時期に伴う可能性が強いものである。また5b類は10世紀頃のものと考えられるので、これらの溝は9世紀から10世紀にかけて役目をはたしていたものと考えられる。

したがってS D109に切られたS B111・112・120建物跡は8世紀代のものといえよう。

またS D101・103・107はS B104のに伴うものであり、出土土師器からも9世紀から10世紀頃の門といえる。したがって、S B104に取り着くS A106C・Dも同時期といえる。それ以前のS A106A・Bは門の部分が閉じており、溝以前の時期つまり8世紀代である可能性が強いといえる。

また今回の調査では墨書土器が多いのが特徴といえる。総数で58点あり、そのうち「白」が31点、「上」又は「㊤」3点、「厨」2点、その他に「屋代」・「水流」・「水」・「柩?」・「文」・「驩家」・「白」・「守」の習書などがある。種類、量とも今回が一番多く、ほとんどが第1トレンチ付近の約500㎡の範囲に集中しているのも特徴といえる。また県道拡幅工事に伴う調査で多くの「白」の墨書を出土したのは第1トレンチの約10cm北側である。したがって第1トレンチ付近は墨書が集中して出土するような性格の地域であったと考えられる。これら墨書のうち「白」は郡名、「厨」は遺構の性格に関係するものであろう。「驩家」・「屋代」は『和名類聚抄』の白河郡の郷名に、「驩家」・「屋代」(註2)があるのでそれに関係するものと考えられる。

「水流」はS D109出土のもので、水野正好氏によれば(註3)、多賀城周辺で出土しているような人面壺絵は疫払いのため水に流したものとされている。これも、このような呪術に関連したものかも知れない。とすると「在(柩?)」＝「怪」も同様のものであろうか。

須恵器 遺構出土で器形が判明したのはS B105・S B119出土の杯と、S K110出土の長頸壺のみであった。

S B 105のものは5a類であり、回転ヘラ切り底のものは8世紀後半～9世紀始め頃に位置付けられており、この建物もこの時期以降のものと考えられる。

S B 110出土の長頸壺は体部が倒卵形を呈し、また内黒のロクロ土師器杯1類を伴っていることから9世紀のものであろう。

返りのある蓋の破片は今回も2点出土しているが、伴う遺構は検出できなかった。

(註1) 木本 元治 「轆轤土師器一杯形土器について」『福島県における土師器編年試論』  
福島県考古学会 昭和51年

小笠原好彦 「東北地方における平安時代の土器について二、三の問題」『東北考古学の諸問題』 昭和51年

(註2) 池邊 彌 「和名類聚抄郷名考證」 吉川弘文館 昭和41年

(註3) 水野 正好 「祭礼と儀礼」『都とむらの暮し』 古代史発掘10 講談社 昭和49年

### 第3節 ま と め

- (1) 本年度の調査により、第8次調査で「院」と考えられた部分の東辺も一本柱列により区画されていることが判明した。
- (2) 「院」の東辺には9世紀頃に掘立柱の八脚門が作られ、東辺ではこの門と同時に一本柱列に沿った大溝も掘られた可能性が強い。したがって、この「院」は9世紀以降の時期には東が正面であったと考えられる。
- (3) 八脚門の中心は第6次調査で検出された一本柱列の東南コーナーより100尺、第8次調査のS B 90の北側柱列より25尺に位置し、計画的に配置されていた可能性が強い。
- (4) 一本柱列の東外側には8世紀～9世紀初め頃までは掘立柱建物群があり、それ以降は消滅したものと考えられる。
- (5) 八脚門及びその東外側から多くの墨書土器が出土している。これらは、この地区の性格にかかわりあるものかも知れない。

関和久遺跡

倉庫院

第9次調査地点

関和久遺跡俯瞰図（北より）





第1図版 作業風景  
(東より)



第2図版 第1トレンチ全景  
(東より)



第3図版 SB104・SA106・  
SD101・103・107・  
108 (北より)



第4図版 SB104・SA106  
(東より)



第5図版 SB105・111・112・  
120, SD109  
(東より)



第6図版 SD101・103, SB104,  
SA106 (東より)



第7図版 SB104,  
SA106断ち割り  
(南より)



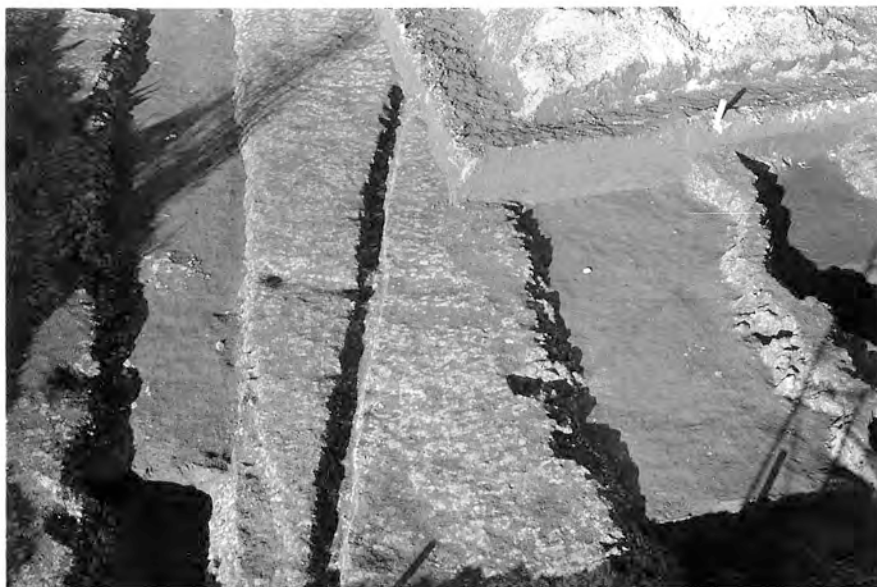
第8図版 SB105・111・112・120,  
SD109 (南より)



第9図版 SB105・111・112・120,  
SD109 (西より)



第10図版 SD102・118 (南より)

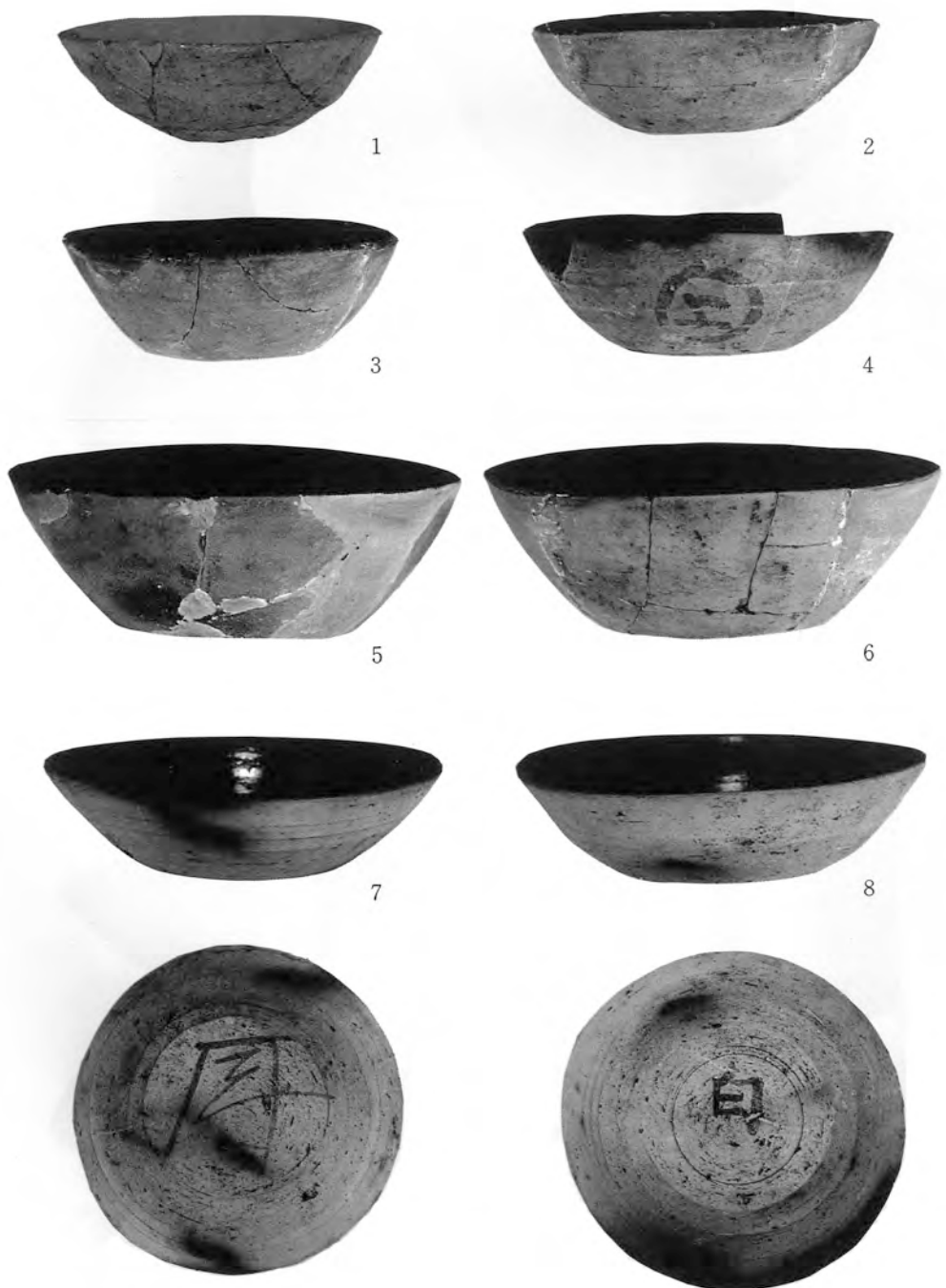


第11図版 SD102他（南より）



第12図版 SK121

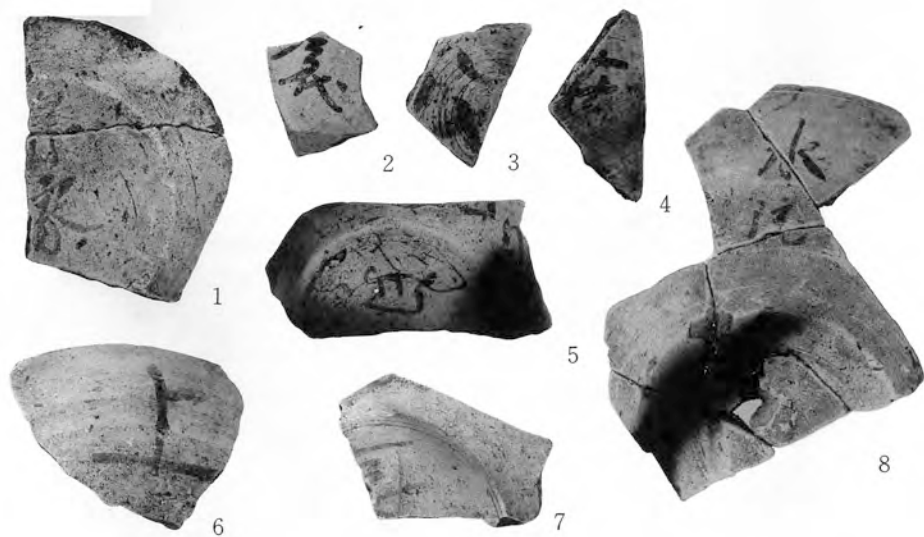




第13図版 1 S D101出土 2 表土出土 3・8 S D109上層出土  
 4 S D107出土 5~7 S D109出土 1~8 土師器杯



第14図版 1 SD102出土 2 SK113出土 3 SK110出土  
1 土師器杯 2 土師器甕 3 須恵器長頸壺



第15図版 1・5・7 SD103出土 2・4 表土出土 3・6・8 SD109出土  
1～8 土師器杯片（墨書土器）

福島県文化財調査報告書第91集

関和久遺跡Ⅸ

昭和56年3月15日印刷

昭和56年3月31日発行

編集・発行 福島県教育委員会  
福島市杉妻町2番16号  
印刷所 株式会社日進堂印刷所  
福島市野田町大檀10 ☎35-1211

不許複製